

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2016

多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

序文

多賀城跡調査研究所は、昭和44年の開設以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を事業の両輪として継続的に実施しています。発掘調査によって古代多賀城の歴史的特質とその価値を詳細に解明し、その成果に基づき、環境整備事業によって分かりやすく多賀城の特徴を現地に表現して県民に親しまれる史跡公園として活用されることをめざしています。

今年度の発掘調査事業は、第90次調査として、外郭南辺の状況を確認し、近々に実施することとしている政庁―外郭南門間整備のためのデータを得ることを目的に、政庁南大路西側の低地にある坂下地区の調査を行いました。調査地点は、これまでの調査により第Ⅰ期の外郭が想定される場所で、低地から丘陵に上る地点にあたります。調査の結果、低地部では厚い基礎盛土の上に築かれた積土遺構とそれを利用した第Ⅱ期以降の通路などを、丘陵部では築地塀に伴うと考えられる柱列跡をそれぞれ検出しました。区画施設は、低地部であっても丘陵に近いところでは、これまでの低地部の調査で明らかとなった材木塀ではなく築地塀の可能性があることが明らかとなるなど、多賀城の外郭施設の構造とその変遷を理解するうえで重要な成果となりました。さらに、東北地方では出土例が少なく、県内では初となる文字の書かれた檜扇が良好な状態で出土し、城内における役人の執務の様子を具体的に示す資料としても大きな注目を浴びました。

環境整備事業では、政庁南面地区を対象とした第10次5ヶ年計画の2年目の事業として、昨年に引き続き政庁南大路の再整備を実施して完成させ、一区切りをつけることができました。今後、環境整備事業は、昨年度に策定した『特別史跡多賀城跡附寺跡整備基本計画』に基づき、平成36年度に迎える多賀城創建1300年の記念事業に向けて、管理団体である多賀城市とも連携しつつ推進してゆく予定です。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査と整備事業に対しご支援を頂いた多くの方々に対し、所員一同感謝を申し上げます。

平成29年3月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 須田良平

目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第90次調査	2
1. 調査の目的と経過	2
2. 調査の成果	6
3. 総括	37
III. 第86・88・89次調査資料の追加報告	45
1. 多賀城跡第86次調査(鴻ノ池地区)で出土した木材の樹種	46
2. 第86次調査区周辺(鴻ノ池)の花粉分析	63
3. 第88・89次調査出土の木簡	73
IV. 付章	79
1. 関連研究・普及活動	79
2. 組織と職員	83
3. 沿革と実績	84

調査要項

多賀城跡第90次調査の発掘調査・整理体制、調査期間、調査面積等は下記のとおりである。

調査主体	宮城県教育委員会（教育長 高橋 仁）
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所（所長 須田良平）
調査員	須田良平・吉野 武・三好秀樹・白崎恵介・廣谷和也・高橋 透
調査期間	平成28年5月23日～平成28年10月14日
調査面積	約430㎡
調査参加者	市川菖暁・伊藤竜子・奥 清志・佐藤一郎・佐藤有佳利・鈴木幸夫 高橋修逸・支部 勝（多賀城跡調査研究所臨時職員） 五十嵐健太・里村静（東北大学大学院） 石川湧香・今西純菜・岸場智子・館前知世・永原智輝・服部壮太郎 花田杜綺・早川文弥・山田翔平・山中陽裕（東北大学）、王晗（東北大学研究生）
整理参加者	佐久間順子・高橋里枝（多賀城跡調査研究所臨時職員）

例 言

1. 本書は、平成 28 年度に実施した多賀城跡の第 90 次調査の成果と多賀城跡環境整備事業、関連研究事業、普及活動の概要等、及び平成 25・27 年度に実施した多賀城跡第 86・88・89 次調査の追加報告を収録したものである。
2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業は多賀城跡調査研究委員会での審議と承認のもとに行っている(第 1 表)。
3. 測量原点は政庁正殿跡身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門の中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ 1° 04′ 東に偏している。政庁正殿と政庁南門の測量基準点の平面直角座標値は東日本大震災後(平成 24 年)に実施した再測量の成果から以下のとおりである。
 正殿 世界測地系 X 座標: -187968.3530m、Y 座標: 13560.4850m、標高: 32.964m
 南門 世界測地系 X 座標: -188037.4930m、Y 座標: 13559.3150m、標高: 29.799m
4. 本書おける遺構の位置の表記は、測量原点から平面直角座標上の東西南北方向の距離(m)で示している。
 例: W5 = 原点から西に 5m、S3 = 原点から西に 5m
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 11 版』日本色研事業株式会社(1996 年)にもとづく。
6. 瓦の分類基準は『多賀城跡 政庁跡 本文編』による。
7. 当研究所の以前の刊行物は『多賀城跡 政庁跡 本文編』を『本文編』、『多賀城跡 政庁跡 図録編』を『図録編』、『多賀城跡 政庁跡 補遺編』を『補遺編』と略記する。また、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』については『年報 2010』などと記し、複数の年報の場合は『年報 1983・2006』、『年報 2011~2014』などと記す。
8. 本調査で得た資料は、宮城県教育委員会で保管している。
9. 本調査の成果の一部は『第 90 次調査現地説明会資料』、『平成 28 年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『第 43 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』、『年報 2013・2015』等で紹介しているが、本書の内容が優先する。
10. 本書のうち、第 86 次調査に係わる樹種同定は東北大学名誉教授の鈴木三男氏、花粉分析は鈴木三男氏と鹿児島大学准教授の吉田明弘氏に依頼し、玉稿をいただいた。他は所員で討議と検討を行い、ⅠとⅡの 1、Ⅲの 3 を吉野 武、Ⅱの 2・3 のうち遺構を廣谷和也、遺物を高橋 透、Ⅳを吉野と白崎恵介が執筆し、全体は吉野が編集した。

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真: 第 90 次調査 SX2962 通路跡を南西より撮影】

氏 名		所 属	専門分野
委員長	佐藤 信	東京大学大学院教授	古代史学
副委員長	飯淵 康一	宮城学院女子大学特任教授	建築史学
委 員	阿子島 香	東北大学大学院教授	考古学
委 員	栗野 隆	東京農業大学准教授	造園学
委 員	小野 健吉	和歌山大学教授	庭園史学
委 員	熊谷 公男	東北学院大学教授	古代史学
委 員	櫻井 一弥	東北学院大学教授	建築デザイン学
委 員	鈴木 三男	東北大学名誉教授	植物学
委 員	古瀬奈津子	お茶の水女子大学基幹研究院教授	古代史学
委 員	松村 恵司	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	考古学

第 1 表 多賀城跡調査研究委員会委員 (任期: 平成 27 年 4 月 1 日~平成 29 年 3 月 31 日)

I. 調査研究事業の計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査と環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの事業を、多賀城跡調査研究委員会における審議と承認のもとで5ヵ年計画を立案して行っている。近年は東日本大震災による県内の復旧事業を優先して事業計画を一部変更して行っており、今年度は外郭施設の調査資料の蓄積を目的とした多賀城跡発掘調査第10次5ヵ年計画の3年次目の事業として第90次調査、政庁南面地区の重点的な整備を行う環境整備第10次5ヵ年計画2年次目の事業として政庁南大路の再舗装と地形測量を実施した。

このうち第90次調査は、当初は五万崎地区で第I期の外郭南辺を調査する計画であったが(第2表a)、公有地化が進展し、政庁南面地区の整備対象に含まれる坂下地区での調査も可能になったことから、多賀城跡調査研究委員会での審議と承認を経て計画を変更して坂下地区の調査を優先し、五万崎地区以下の調査は第91次調査以降に順次繰り下げて行うことにしたものである(同表b)。以下、本書では主に坂下地区で実施した第90次調査と、以前に同地区で行った第86次調査出土の木製品、科学分析等の成果について記し、その他の今年度の事業の概要については付章で述べる。

年 度	次 数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成26年	87次	外郭南辺(田屋場・坂下地区)	910 m ²	外郭南門・南辺の検討
平成27年	88次	外郭南辺東半(立石地区)	390 m ²	外郭南辺の検討
	89次	政庁南大路(城前地区)	280 m ²	政庁南大路の補足調査
平成28年	90次	外郭南辺(五万崎地区)	1000 m ²	第I期外郭南辺の検討
平成29年	91次	外郭西辺(五万崎・西久保地区)	1000 m ²	外郭西辺の検討
平成30年	92次	外郭西・北辺(西久保・丸山地区)	1000 m ²	外郭北西隅の検討

第2表a 多賀城跡発掘調査第10次5ヵ年計画(変更前。平成26・27年は実績)

年 度	次 数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成26年	87次	外郭南辺(田屋場・坂下地区)	910 m ²	外郭南門・南辺の検討
平成27年	88次	外郭南辺東半(立石地区)	390 m ²	外郭南辺の検討
	89次	政庁南大路(城前地区)	280 m ²	政庁南大路の補足調査
平成28年	90次	外郭南辺(坂下地区)	430 m ²	第I期外郭南辺の検討
平成29年	91次	外郭西辺(五万崎地区)	1000 m ²	第I期外郭南辺の検討
平成30年	92次	外郭西辺(五万崎・西久保地区)	1000 m ²	外郭西辺の検討

第2表b 多賀城跡発掘調査第10次5ヵ年計画(変更後。平成26～28年は実績)

II. 第90次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 調査の目的

第90次調査は公有地化が進展し、今後重点的に環境整備を行う政庁南面地区に含まれる坂下地区において、第I期外郭南辺跡の調査が可能になったことから実施したものである。

第I期の外郭南門・南辺跡は、第74次調査で従来の南門跡よりも北の政庁南大路上において新たに第I期の門跡を発見したことを契機とし(『年報2003』)、その後の再検討と調査を経て、南側の第II期以降の南門・南辺跡よりも約120m北側に位置したことが判明している(図版1)。そのうち、南門跡から東側の南辺については、以前に調査した遺構の再評価と近年の調査の結果、外郭東辺までの区画施設の連続性とその構造・規模等の状況を把握している(『年報1981・1982・2006・2007』)。南辺東半の区画施設は低地では材木堀、東南隅と南門すぐ東側の丘陵では積土遺構を検出しており、積土遺構は築地堀の可能性がある。一方、西半は南門跡西側に隣接する坂下地区の「鴻ノ池」と通称される沢地で行った第81・86次調査で材木堀跡やその基礎地業を検出しているが(『年報2009・2013』)、南門跡から約65m西の地点までの確認に止まり、その先の丘陵部の状況は不明のままである。

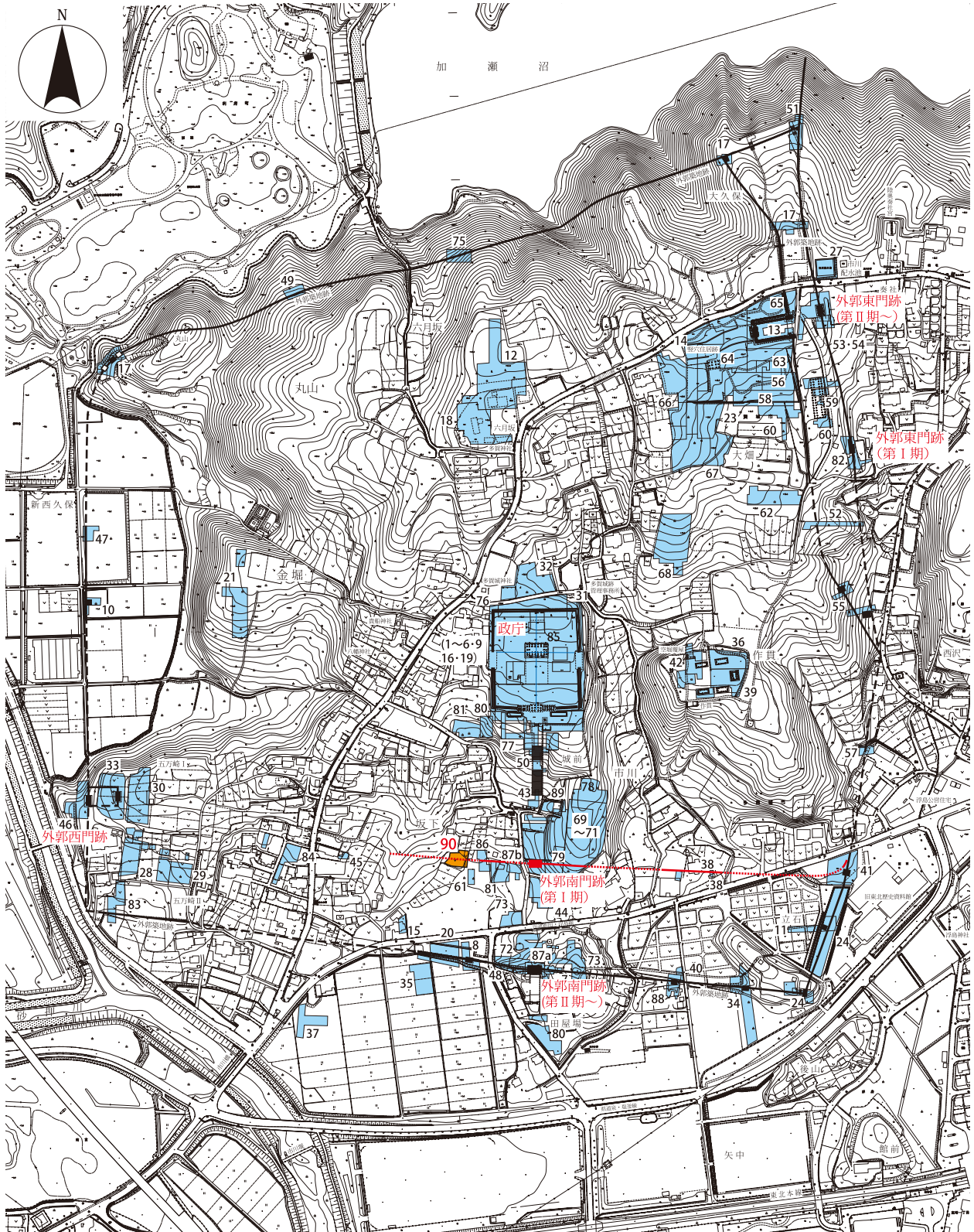
そこで、本調査では沢地から丘陵部に登る場所における区画施設の延長とその状況を確認し、さらに南辺の南側への移動後の状況や変遷を把握することによって、政庁南面地区に含まれる「鴻ノ池」の環境整備に資する資料を得ることを目的として行った。

(2) 調査の概要

坂下地区と調査区の位置：坂下地区は政庁跡の南西に位置し、政庁南大路と城外南西の市川橋から外郭東門跡を通じて塩釜に至る市道市川線(旧塩竈街道)に挟まれた地区である(図版1)。市道が走る丘陵尾根筋から南に派生した丘陵を中軸とし、その東側と西側には南の低地から沢が入り込む地区で、東側の「鴻ノ池」と通称される沢については、古代は池沼であったとみられてきた。(『年報1991』)。

今回の調査は、その沢を東西に横断するとみられる第I期の外郭南辺跡が西側の丘陵部に上がる場所を対象とし、3年前に南辺跡にあたる材木堀跡を検出した第86次調査区から20～45m西側に東西約35m、南北約25mの調査区を設定した。政庁正殿跡の多賀城原点からは南に245m前後、西に90m前後の場所に位置する。

調査の経過と方法：調査は5月23日から重機で掘削を開始した。調査区内は西側が丘陵、東側が沢という地形を反映して西辺付近では深さ30cm前後の表土直下で地山の岩盤が露出したが、東に向かって深く傾斜するとともに軟弱な地盤となっていた。このため重機による掘削は最大で1m程に留め、調査区内の東・南・北辺に階段上のテラスを設けて、その内側を遺構が確認できる面まで人手で掘り下げることにした(図版3)。また、重機による掘削の時点では第I期の南辺跡にあたる区画施設がまだ確認されなかったこと、以前に調査した東側の第81・86次調査区の沢地内では遺構面が複数検出さ



- 過去の調査区(数字は調査回数)
- 今年度の対象調査区(第90調査区)

0 100 200 300 400 500m
(S=1/7,000)

図版 1 第 90 次調査区の位置

れたことから、その状況を把握するために調査は東半部を先行して行い、南北方向のトレンチを設けて上から遺構面を確認しながら進めることにした。

その結果、まずブロック状の灰白色火山灰を含む7層上面で掘立柱建物跡、井戸跡、溝、小溝状遺構などの遺構を確認したため6月7日から精査を行い、続けて写真撮影・図面作成による記録作業を行った。そのうえで20日から3層を除去し、8層上面で遺構の確認作業を行ったところ、以前の調査で通路とみたSX2962盛土遺構の延長とそれに伴う側溝を確認した。そこで、7月5日から側溝や堆積土を掘り下げ、東半部の盛土遺構の全体を検出した。その作業中の12日には南側の堆積土から多数の文字が習書された扇が出土している。文字が書かれた檜扇の出土は県内では初めてである。

堆積土の掘り下げが終了した21日には盛土遺構の写真を撮影し、続いて図面作成と平行しながら部分的な断ち割りによる盛土遺構の精査とその下層に推定される第I期の区画施設の確認を進めた。断ち割りのトレンチは粘性の強い沢地の旧表土を堆積土と誤認したために地山の岩盤まで掘り下げたが、トレンチの東・西壁の断面観察を通して8月9日に南北幅約4.5m、高さ約0.3mの基礎地業の上に構築された幅約2.1m、残存高約0.2mの積土による区画施設の存在を捉えた。そこで、それらをトレンチの外側で確認するとともに、18日からは調査区西半部についても7層上面の遺構確認作業と併行して区画施設の延長部分にトレンチを設けて検出を進めた。その結果、基礎地業の範囲と積土に伴うとみられる柱列跡を確認した。また、本調査区では東側の第86次調査区で確認したような材木堀跡による区画施設は検出されず、積土遺構とそれに伴う基礎地業、柱列跡を検出した点から、沢地から丘陵に上がる場所では区画施設の構造が異なり、築地堀の可能性があるとみられた。

以上のような経過で検出した遺構はデジタルカメラで状況を撮影し、縮尺1/20の平・断面図を作成して記録した。図面の作成にあたっては城前地区に埋設された「城前1」「城前2」「城前3」の基準点を用いた。遺構番号は3289番から付し、10月11日には遺構の精査と記録を終了した。調査区の埋戻しは12日から手作業と重機で行い、調査の一切を終了したのは10月14日である。

また、調査期間中の9月1・2日には多賀城跡調査研究委員会を開催して調査成果に関する指導と承認を受けた。それを踏まえて9月15日に調査成果を報道機関に公表し、9月17日には現地説明会を開催した。説明会の当日は良好な天候に恵まれ、約220名の参加者を迎えて発見した遺構と遺物について説明を行った。さらに、調査終了後の12月11日には平成28年度宮城県遺跡調査成果発表会、平成29年2月25日には第43回古代城柵官衙遺跡検討会でも成果の概要を報告している。

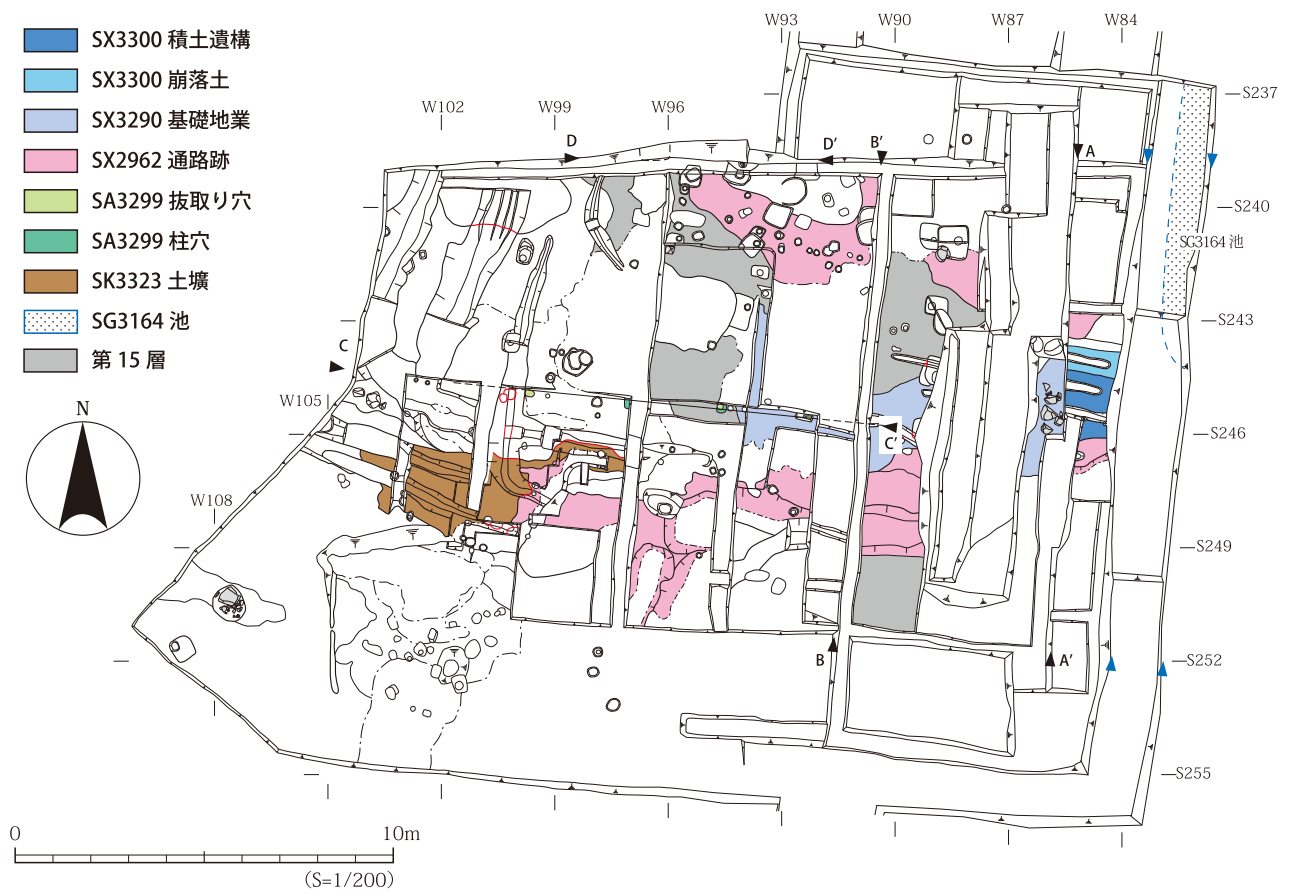


調査区遠景（南から）



SX2962 通路跡検出状況（南から）

図版2 調査区写真



調査区全体図



調査区全体写真（上が北）

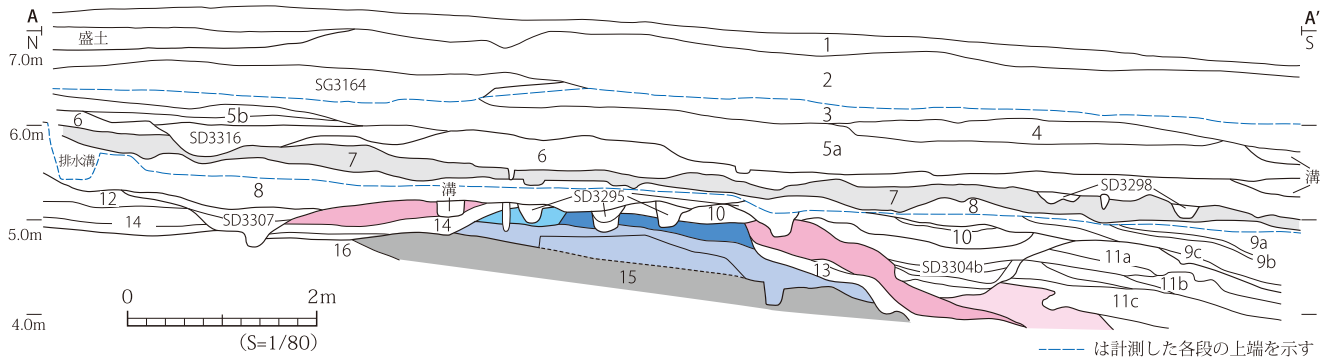
図版3 調査区全体図と全体写真

2. 調査の成果

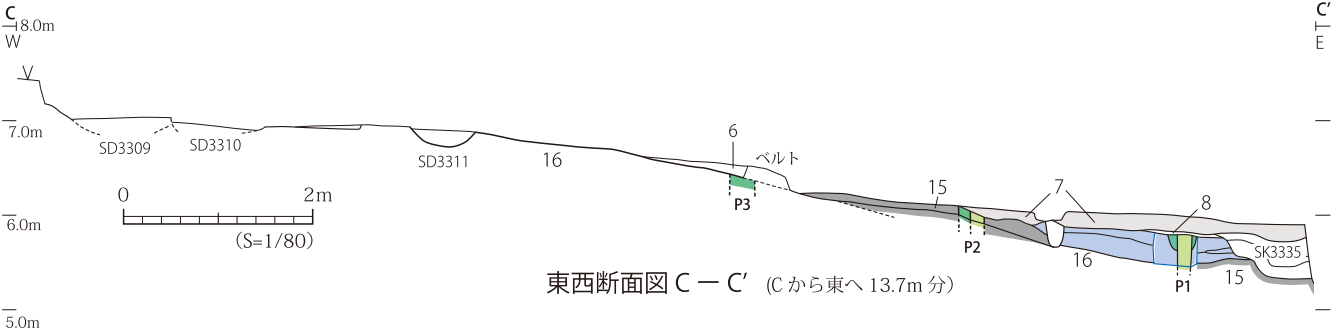
(1) 基本層序(図版 1~4)

今回の調査区は、南から政庁の西側に入り込む沢とその西側の丘陵裾にかけて設定した。調査区内の標高は3.9m~7.8mである。標高の低い東側は、地形を反映して東側ほど厚く土砂が堆積する。一方、西側は削平のため厚さ0.1~0.4mの表土(第1層)直下が地山(第16層)となっている。南北方向では南東隅が最も深く、厚さ2.9m分の堆積がみられた。堆積土はいずれも自然堆積層で、全14層に大別している。また、調査区中央を東西に延びるSX3300積土遺構やSX2962通路跡を境として、第9~11・13層は南側、第12・14層は北側に分布する。各層の特徴を以下に示す。

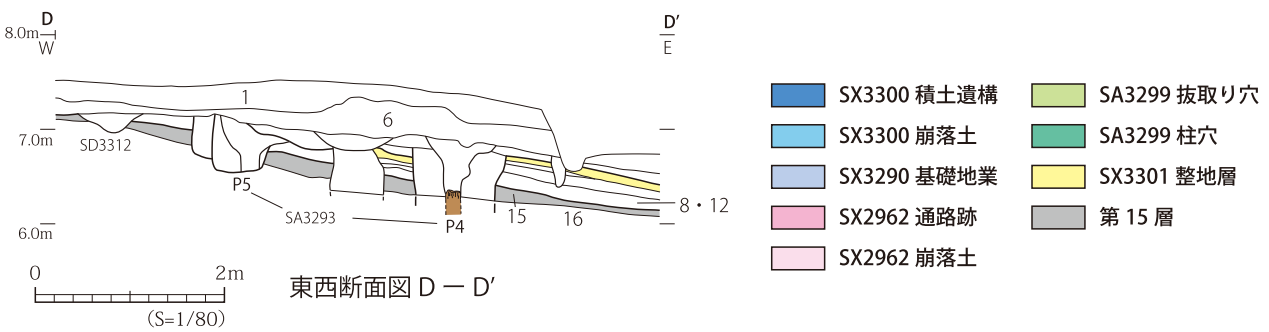
- 【第1層】暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層からなる表土。厚さは10~40cmである。
- 【第2層】炭化物とにぶい黄褐色の地山土をブロック状に含む黒褐色(10YR3/1)シルト層で、厚さは10~60cmである。
- 【第3層】炭化物を含む褐色(7.5YR4/6)砂層で、厚さは10~20cmである。19世紀半ば頃にSG3164池が掘り込まれている。
- 【第4層】暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土層と、灰オリーブ(5Y5/2)砂層の互層で、厚さは10~30cmである。
- 【第5層】地山ブロック・炭化物を含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト層のa層と、炭化物を含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト層のb層に細分され、b層は北側でのみ確認した。厚さ10~50cmである。
- 【第6層】炭化物を含む黒色(2.5Y2/1)シルト層で、厚さは10~40cmである。須恵系土器を主体とした多くの土器片を含み、12世紀後半頃の手捏ねかわらけもみられる(図版19-13)。
- 【第7層】10世紀前葉頃に降下したブロック状の灰白色火山灰を不均質に含む黄灰色(2.5Y2/1)砂質シルト層である。少量の炭化物を含み、部分的に粘性の強い箇所もみられる。厚さは10~30cmである。
- 【第8層】少量の炭化物を含むオリーブ灰色(10Y5/2)シルト質砂層である。厚さは最大50cmで、北側が厚い。
- 【第9層】暗黄灰色(2.5Y4/2)砂質シルト層のa・c層、黒褐色(2.5Y3/1)シルト層のb層に細分される。厚さは最大50cmで、南側ほど厚さを増す。
- 【第10層】灰オリーブ色(10Y5/2)砂層で、ラミナ状の堆積が認められる。厚さは10~20cmである。
- 【第11層】黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層のa層、黄灰色(2.5Y4/1)粘土層のb層、灰色(5Y4/1)粘土層のc層に細分され、SX2962通路跡の崩落土を含む。厚さは50~70cmで、南側ほど厚い。
- 【第12層】灰黄褐色(10Y6/2)砂層と、黒褐色(7.5YR3/1)スクモ層の互層で、SX2962通路跡の崩落土を含む。厚さは20~30cmである。
- 【第13層】SX3300積土遺構の崩落土を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂層で、厚さは20cmである。



南北断面図 A - A' (3 段分を合成)



東西断面図 C - C' (C から東へ 13.7m 分)



東西断面図 D - D'

図版 4 調査区地形・基本層序断面図

【第14層】SX3300 積土遺構の崩落土や炭化物を含む、黒褐色(2.5Y3/2)・オリーブ黒色(5Y2/3)のシルト質粘土層で、厚さは20~30cmである。

【第15層】黒褐色(7.5YR3/1)や褐灰色(7.5YR4/1)シルト層からなる旧表土。厚さは最大30cmである。標高の高い西側では、灰黄褐色(10YR4/2)シルト層となり、漸移的に第16層と連続する(図版4の断面C-C')。

【第16層】にぶい黄橙色(10YR6/4)の岩盤からなる地山層。

各層の堆積年代は、出土遺物や灰白色火山灰との関係から、第8層以下が10世紀前葉以前、第7層以上が10世紀前葉以降、第6層以上が12世紀後半以降、第2層以上が19世紀半ば頃以降である。また、第86次調査の層序と比較すると、灰白色火山灰をブロック状に含む第7層が対応する。なお、第86次調査で捉えられた灰白色火山灰の第一次堆積層(第8層)は、本調査区では確認していない。

(2) 発見遺構と出土遺物

遺構は、堆積層が厚い調査区中央から東側で重層的に検出している。出土遺物や第86次調査との関係から、検出面が第7層上面以下のものを古代、第6層上面以上のものを中世以降の遺構に分けることが可能である(註1)。また古代の遺構のなかでも、灰白色火山灰との関係から検出面が第8層以下のものは降下前、第7層上面のものは降下後の遺構に分かれる。

このような状況から、以下では「A古代の遺構」、「B中世以降の遺構」の順に記述し、古代の遺構は「i灰白色火山灰降下前の遺構」、「ii灰白色火山灰降下後の遺構」、「iii灰白色火山灰との関係が不明な遺構」として主な遺構の概要を説明する。また、溝・土壇は記述したものも含めて第3・4表にまとめた。なお、基本層序の出土遺物は、灰白色火山灰降下前の層出土のものを中心に、注目すべき資料に限って取り上げた。

A 古代の遺構

古代の遺構には、区画施設1(基礎地業1、積土遺構1)、通路跡1、整地層1、柱列跡4、竪穴遺構1、井戸2、小溝群4、溝12、土壇9の他、多数のピットがある。

i 灰白色火山灰降下前の遺構

◎区画施設

調査区東側中央の旧表土(第15層)上に構築された、SX3290基礎地業とその直上のSX3300積土遺構からなる東西方向の区画施設を検出した。東側は調査区外へさらに延びる。

【SX3290基礎地業】(図版5～8・13)

標高の高い北・西側では、旧表土を一部削って盛土を行い、SX3300積土遺構の基礎とした遺構である。SX3300積土遺構、SX2962通路跡、SA3299柱列跡、SD3295小溝群、SD3289溝より古い。

長さは9.2m分を検出した。幅はW85ライン(断面A-A')で4.5m、W91ライン(断面B-B')で6.3m以上あり、西側が広い。横断面形は扁平な台形状を呈す。厚さは最大0.35mで、東側ほど厚い。

盛土は3層に分かれる。上から径3cm前後の地山ブロックを含む黒色(10YR3/1)や暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト、炭化物・灰・にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト粘土を含む黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト、径3cm前後の地山ブロック・炭化物・焼土を含む黒褐色(10YR3/1)や褐灰色(10YR4/1)の砂質シルトで、西端付近の盛土は一部グライ化している(図版6断面C-C')。また、W86ライン付近の最下層には、長径20～40cmの垂円礫が含まれている(図版5最終平面図・図版8)。

遺物は盛土直下の第15層直上から土師器坏・甕、須恵器甕が出土している(図版8最下段左)。土師器は非ロクロ整形で、坏(図版13-1)は口縁部と体部の境に段をもち、扁平な丸底状を呈しており、口唇部内面はくぼむ。

【SX3300積土遺構】(図版5～8・13)

SX3290基礎地業上の中央で検出した。SX3290基礎地業より新しく、SX2962通路跡、SD3295小溝群より古い。

W85 ライン付近で長さ 1.3m 分を検出しており、幅は上幅 1.9m、下幅 2.1m である。横断面形は両側が 70° 前後で立ち上がる台形状を呈し、高さは最大 0.25m 残存する。積土は地山ブロックを主体としたにぶい黄褐色 (10YR6/4) 土と、黒褐色 (2.5Y3/2) シルトからなり、一部では両者が厚さ 3~5cm で版築状に互層をなす。

遺物は出土していない。

◎通路跡

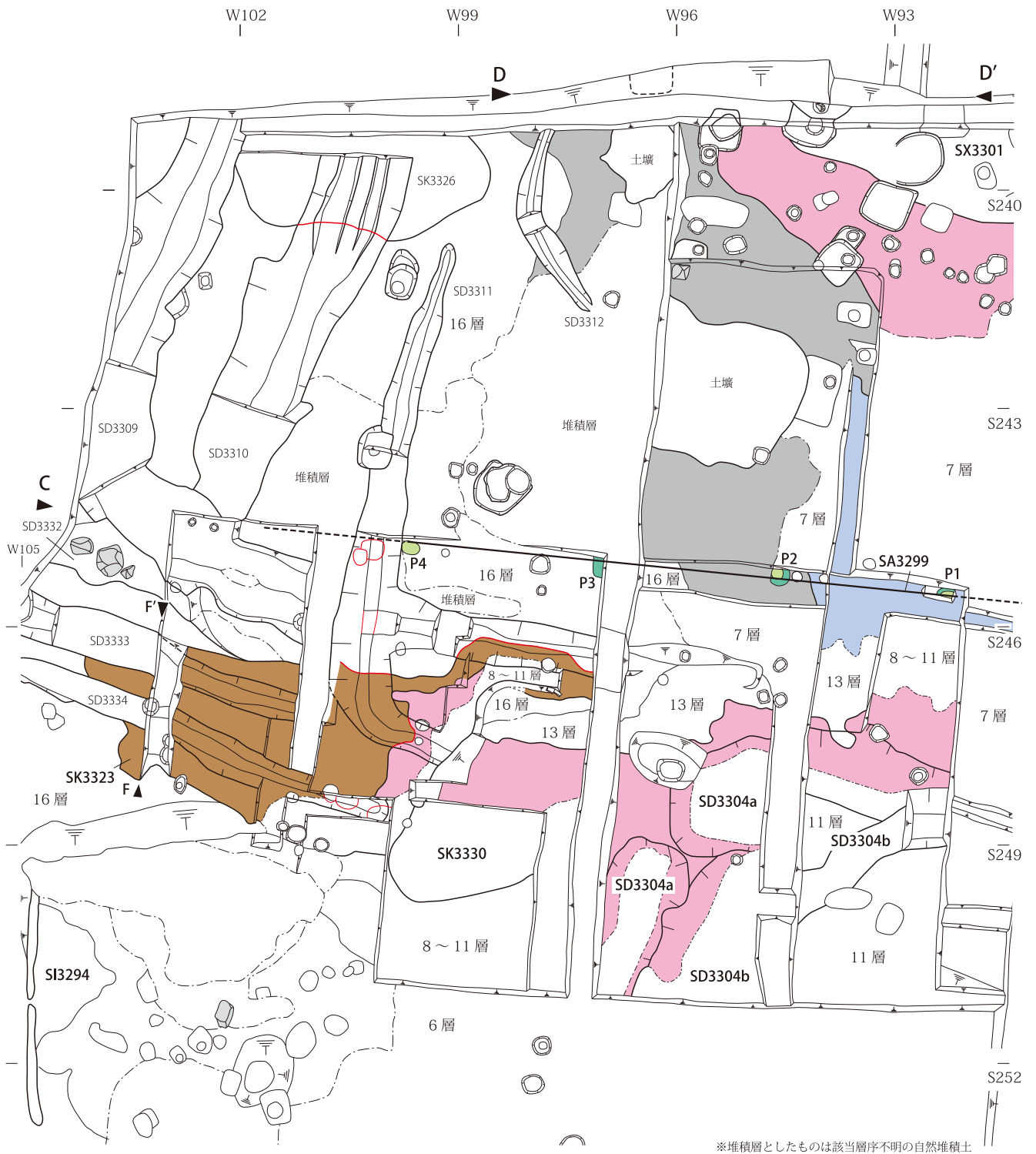
【SX2962 通路跡】(図版 5・6・7・9・13)

調査区中央から東側の第 13~15 層上に構築された、政庁南大路から坂下地区西側の丘陵に延びる東西方向の通路跡を検出した。東側は調査区外へさらに延びる。SX3290 基礎地業・SX3300 積土遺構による高まりの両側に盛土をして通路とした施設で、西側では幅を広げて丘陵部に取り付く。第 81・86 次調査で検出し、通路としての機能を想定していた SX2962 盛土遺構(註 2)の延長にあたる。路面は削平により失われているが、当初は高まりのみで機能し、南北両側に土砂が堆積した後は側溝として SD3304 溝(南側)と SD3307 溝(北側)が設けられている。今回、盛土は幅を広げて丘陵部に取り付くこと、両脇に側溝が設けられる時期があることを確認し、通路としての機能がより確かなものとなったことから、SX2962 通路跡として報告する。なお、第 86 次調査で確認した盛土は A~E の変遷を捉えているが、灰白色火山灰との関係から、本調査区の通路跡は A~D の時期に対応する。SX3290 基礎地業、SX3300 積土遺構、SK3323 土壇より新しく、SD3295 小溝群、SA3292 柱列跡、SX3301 整地層、SD3289・3311 溝より古い。

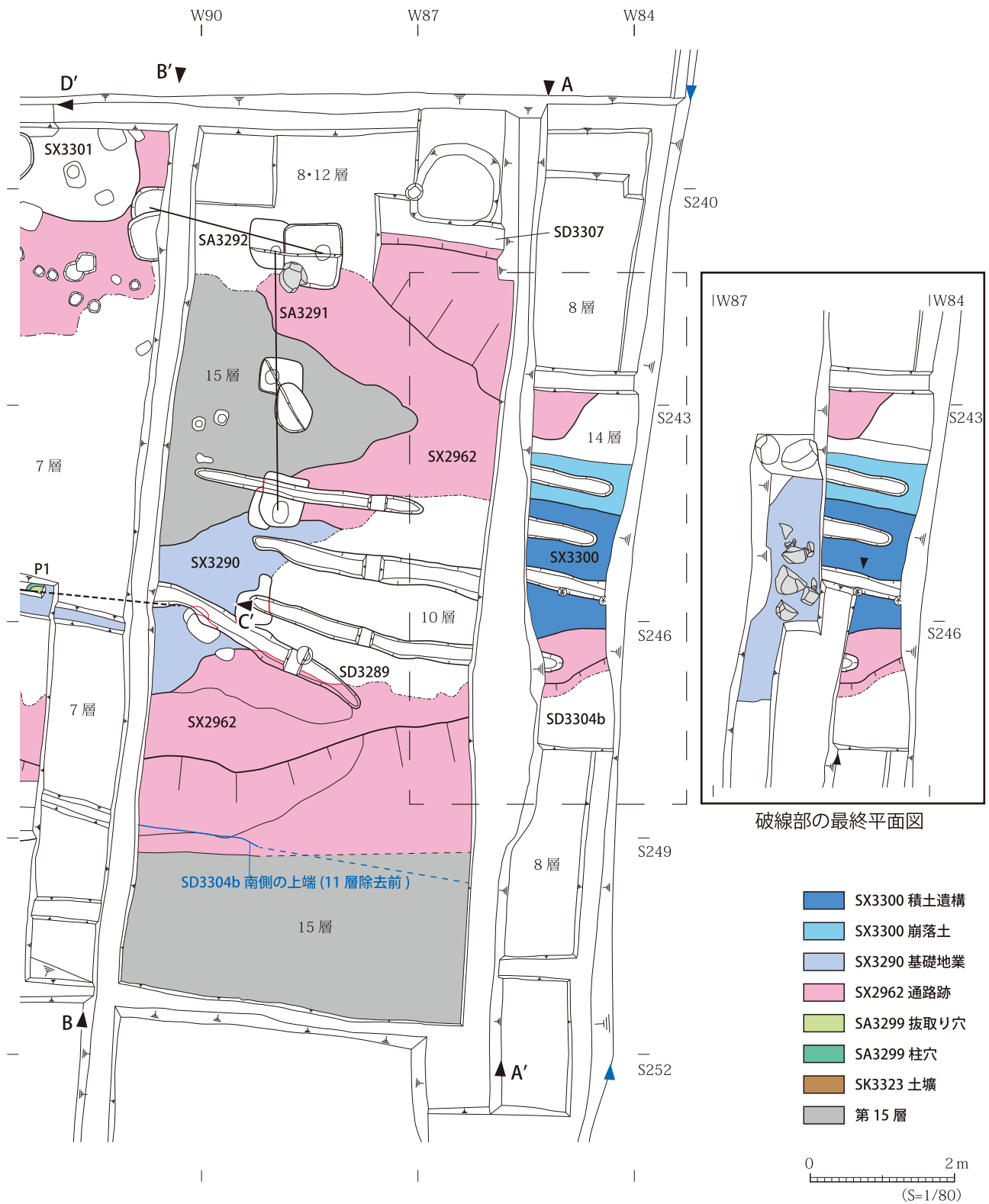
盛土は長さ 15.8m 分を検出しており、上面の標高は東側ほど低い。北・東・南側は調査区外へさらに延びる。下部の SX3290 基礎地業・SX3300 積土遺構を合わせた横断面形は、全体が南側にやや傾く台形状を呈す。南北幅は W85 ライン(断面 A-A')で上幅 4.5m、下幅 8.2m、W91 ライン(断面 B-B')で幅 12.0m 以上で、西側ほど広い。厚さは最大 0.4m で、東側ほど厚くなる。旧表土からの高さは南東隅で最大 1.1m である。北側がにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトや褐色(7.5YR4/6)シルト、南側が黄褐色(10YR5/6)砂質シルト、褐色(7.5YR4/6)シルトからなる。

SD3304 溝は第 11 層上面で長さ 12.6m を検出しており、南・東側は調査区外へさらに延びる。一度掘り直されており(a→b)、通路幅が広がる西端では南西方向に屈曲する。方向は発掘基準線に対して a が東で南に 8°、b が東で南に 6° 振れ、西端では a・b とも発掘基準線に対して北で東に 27° 振れる。幅は a が 1.0m、b が 0.5~2.8m で、断面形は皿状を呈する。深さは a が 0.2m 以上、b が 0.3~1.2m で、東側ほど広く、深い。堆積土は、黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂や黒色(2.5Y2/1)砂質シルトなどの自然堆積土で、最下層には盛土の崩落土とみられる地山ブロックが少量含まれる。

SD3307 溝は第 12 層上面で長さ 1.8m 分を検出した。東側は調査区外にさらに延びるが、西側への延びは不明である。方向は発掘基準線に対して東で南に 7° 振れる。断面形は底面に凹凸のある皿状で、幅は 2.2m、深さは 0.5m である。堆積土は、黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルトや黒色(5Y2/1)粘土質シルトで、自然堆積土である。



図版5 灰白色火山灰降下前の遺構(1) 西半



図版5 灰白色火山灰降下前の遺構(1) 東半



断面 A-A' (西から)



断面 B-B' (南東から)



断面 B-B' (東から)



断面 C-C' (南東から)

図版 7 各断面 (断面 A-A'・B-B'・C-C') 写真



SX3290・SX3300(南西から)



SX3290・SX3300と調査区東側(西から)



SX3290・SX3300(西から)



SX3300 断面拡大(西から)



SX3300 拡張状況(南西から)



SX3290 下遺物出土状況(南西から)



SX3290 西側(南西から)

図版 8 SX3290 基礎地業・SX3300 積土遺構写真



SX2962 通路跡 (西から)



SX2962 通路跡 (南西から)



SX2962 通路跡 (南から)



SX2962 通路跡 (北東から)



SD3307 溝 (北西から)



SD3304b 溝断面 (西から)

図版 9 SX2962 通路跡・SD3304・3307 溝写真

遺物は盛土中から非ロクロ整形の土師器坏・甕や須恵器甕、崩落土から非ロクロ整形の土師器甕、須恵器甕が出土し、ほかに土師器埴・甕、須恵器坏が出土している。須恵器坏 (図版 13-2) は底部ヘラ切り無調整で、底面には板目状圧痕が観察できる。

SD3304 溝からは、土師器坏 (図版 13-4・5)・高台坏または皿 (6)・耳皿 (7)・甕 (8)、須恵器坏 (9)・高台坏・蓋・盤・長頸瓶・甕、須恵系土器坏・高台鉢、瓦、土製品、木製品が出土している。4 は底部回転糸切り無調整で、内面底部には横方向へ密にヘラミガキが施される。5 は底部回転糸切り後手持ちヘラケズリで、内面底部には放射状ヘラミガキが施される。6 は高台が「ハ」字状にひらき、端部接地面はわずかにくぼむ。7 は底部回転糸切り無調整である。8 は胴部下端で、内外面ともにヨコハ

ケである。9 は底部へラ切り後ナデで、底部外面に「全」の墨書が確認できる。瓦には丸瓦・平瓦がある。丸瓦はⅡB類、平瓦はⅠC・ⅡA・ⅡB類があり、平瓦ⅠC類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1・3がある。土製品には土錘(10)、木製品には燃えさしがある。

SD3307 溝からは須恵器坏が出土している。

◎その他の遺構

【SX3301 整地層】(図版4・6・11・13)

調査区北側中央の第8層上に盛土された整地層で、調査区北側へさらに広がる。SX2962 通路跡、SX3290 基礎地業、SA3291・3292 柱列跡、SK3325 土壌より新しい。確認した範囲は南北4.7m、東西5.4mで、厚さは最大0.3mである。盛土は地山ブロックを主体とした明黄褐色(10YR7/6)のシルトで、しまりが強く固い。炭化物を少量含み、部分的に焼土を含む。

遺物は、土師器坏(図版13-11~14)・高台坏・耳皿・甕、須恵器坏(15)・高台坏・長頸瓶・甕、須恵系土器坏(16)・皿・鉢(17)、灰釉陶器坏(18)、瓦、動物遺存体が出土している。11・13は底部回転糸切り後体部下端にかけて手持ちへラケズリであるが、前者はコップ状を呈し、内面底部に横方向へ密なへラミガキ、後者は内面底部に放射状へラミガキが施される。12は底部から体部下端にかけて回転へラケズリが施され、内面底部には横方向へ密なへラミガキが認められる。また胎土には金雲母を多量に含む。14は外面に墨書が確認できる。15は底部へラ切り後手持ちへラケズリである。16は回転糸切り無調整で、体部は外傾して口縁部へ直線的にのびる。17は口縁端部をつまみあげ、体部外面には縦方向へ手持ちへラケズリが施される。18は内外面ともにハケ塗りである。瓦には丸瓦・平瓦・塼がある。丸瓦はⅡ・ⅡB類、平瓦はⅠA・ⅡA・ⅡB・ⅡC類があり、平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ2がある。塼(10)は裏面に抉りをもたず文様のないⅠB類で、接合痕の観察から板状の粘土に複数の粘土塊を重ねて成形しており、へラケズリ後ナデ調整が施される。動物遺存体には獣骨がある。

【SA3299 柱列跡】(図版5・6・10)

調査区中央で検出した東西3間以上の柱列跡である。東端のP1はSX3290基礎地業上、それ以外は旧表土(第15層)もしくは地山(第16層)上面で検出している。また、東端のP1は第8層に、P2が第7層にそれぞれ覆われる。SX3290基礎地業より新しい。方向は発掘基準線に対して東で南に6°振れる。柱痕跡は確認していないが、各抜取り穴や柱穴の中心から柱位置を推定すると柱間は2.4~2.5mで、総長は7.5m以上である。確認した柱穴は一辺0.4mの隅丸長方形で、埋土は黄褐色(10YR5/8)粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

【SA3291 柱列跡】(図版6・11)

調査区中央北側の第12層上面で検出した、南北2間の柱列跡である。SX3290基礎地業、SX2962通



P2 (南から)



P1 (南東から)

図版 10 SA3299 柱列跡

路跡より新しく、SX3301 整地層、SA3292 柱列跡、SD3295 小溝群、SD3308 溝より古い。方向は北で西に 1° 振れる。北端で確認した柱痕跡と、その他の柱抜き取り穴や柱穴の中心から規模を推定すると、総長は 3.7m で、柱間は北から (1.9)・(1.8) m である。柱穴は一辺 0.4~0.6m の隅丸長方形で、深さは最大で 0.3m である。掘方埋土は地山ブロックと炭化物を少量含む黒褐色 (7.5YR3/2) シルトで、柱痕跡は直径 0.15m の円形を呈す。

遺物は器種不明の土師器・須恵系土器坏・鉢・甕、瓦が出土している。

【SA3292 柱列跡】 (図版 11・13)

調査区中央北側の第 12 層上面で検出した東西 1 間以上の柱列跡で、西側へ延びる可能性がある。SX2962 通路跡、SA3291 柱列跡より新しく、SX3301 整地層より古い。方向は東で南に 15° 振れる。東端で確認した柱痕跡と柱抜き取り穴の中心で規模を推定すると、柱間は (2.3m) である。柱穴は一辺 0.7~0.9m の隅丸長方形で、深さは最大 0.6m である。掘方埋土は地山ブロックと炭化物を少量含む黒褐色 (7.5YR3/2) シルトで、柱痕跡は 0.20m の円形を呈す。

遺物は土師器甕 (図版 13-3)、須恵器坏・鉢、瓦が出土している。図示した甕は胴部外面にススが付着する。瓦には平瓦ⅡB類がある。

【SD3295 小溝群】 (図版 5・11)

調査区東側中央の第 10 層上面で検出した。東西方向にほぼ等間隔で平行し、断面形・堆積土が類似する 4 本の溝からなる。SX3300 積土遺構、SX3290 基礎地業、SX2962 通路跡、SB3291 小溝群、SA3292 柱列跡より新しい。

確認した範囲は東西 5.9m、南北 3.0m で、東側は調査区外へさらに延びる。各小溝の間隔は 0.7~1.0m で、方向は発掘基準線に対して東で南に 10° 振れる。小溝の規模は最も長いもので長さ 5.6m、幅が 0.4m、深さは 0.5m で、断面形は U 字状を呈する。堆積土は少量の地山ブロックと炭化物を含むオリーブ黒色 (5Y3/2) の砂質シルトで、自然堆積土である。

遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦が出土している。


















北東部空撮（上が北）



0 2 m
(S=1/80)

※重複する遺構は青線が新しい

- | | |
|---|--|
|  SX3300 積土遺構 |  SA3299 抜き穴 |
|  SX3300 崩落土 |  SA3299 柱穴 |
|  SX3290 基礎地業 |  SA3291 柱穴 |
|  SX2962 通路跡 |  SA3291 柱痕跡 |
|  SX3301 整地層 |  SA3291 抜き穴 |
|  SD3295 小溝群 |  SA3292 柱穴 |
|  第15層 |  SA3292 柱痕跡 |
| |  SA3292 抜き穴 |

図版 11 灰白色火山灰降下前の遺構（2）

【SD3289 溝】 (図版 11)

調査区東側中央の第 10 層上面で検出した東西方向の溝である。SX3290 基礎地業・SX2962 通路跡より新しい。長さは東西 3.3m 以上で、方向は発掘基準線に対して東で南に 30° 振れる。幅は 2.2m、深さは 0.5m で、断面形は U 字状を呈する。堆積土は、少量の地山ブロックと炭化物を含むオリーブ黒色 (5Y3/2) 砂質シルトで、自然堆積土である。

遺物は出土していない。

【SD3308 溝】 (図版 11)

調査区北東部の第 8 層上面で検出した東西方向の溝である。SX2962 通路跡、SA3291 柱列跡より新しい。検出した長さは 3.6m で、方向は発掘基準線に対して東で南に 10° 振れ、西端で南西方向にゆるやかに屈曲する。幅は 1.2m、深さは 0.1m で、断面形は皿状を呈する。堆積土は、少量の炭化物や灰白色火山灰小ブロックを含むオリーブ灰色 (10Y5/2) シルト質砂で、自然堆積土である。

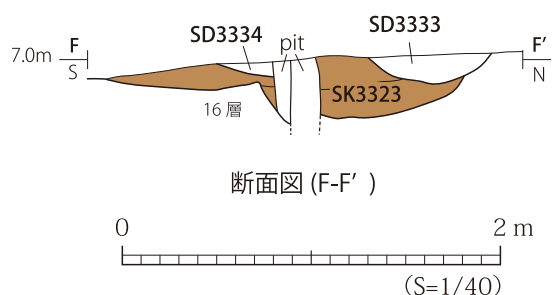
遺物は、土師器坏・甕、須恵器甕、須恵系土器坏、瓦が出土している。瓦には丸瓦、平瓦 I A・II B 類、平瓦 II B 類には a タイプ 1・2 がある。

【SK3323 土壌】 (図版 5・12)

調査区中央西側の地山 (第 16 層) 上面で検出した土壌である。SX2962 通路跡、SD3309・3310・3311・3332・3333・3334 溝より古い。

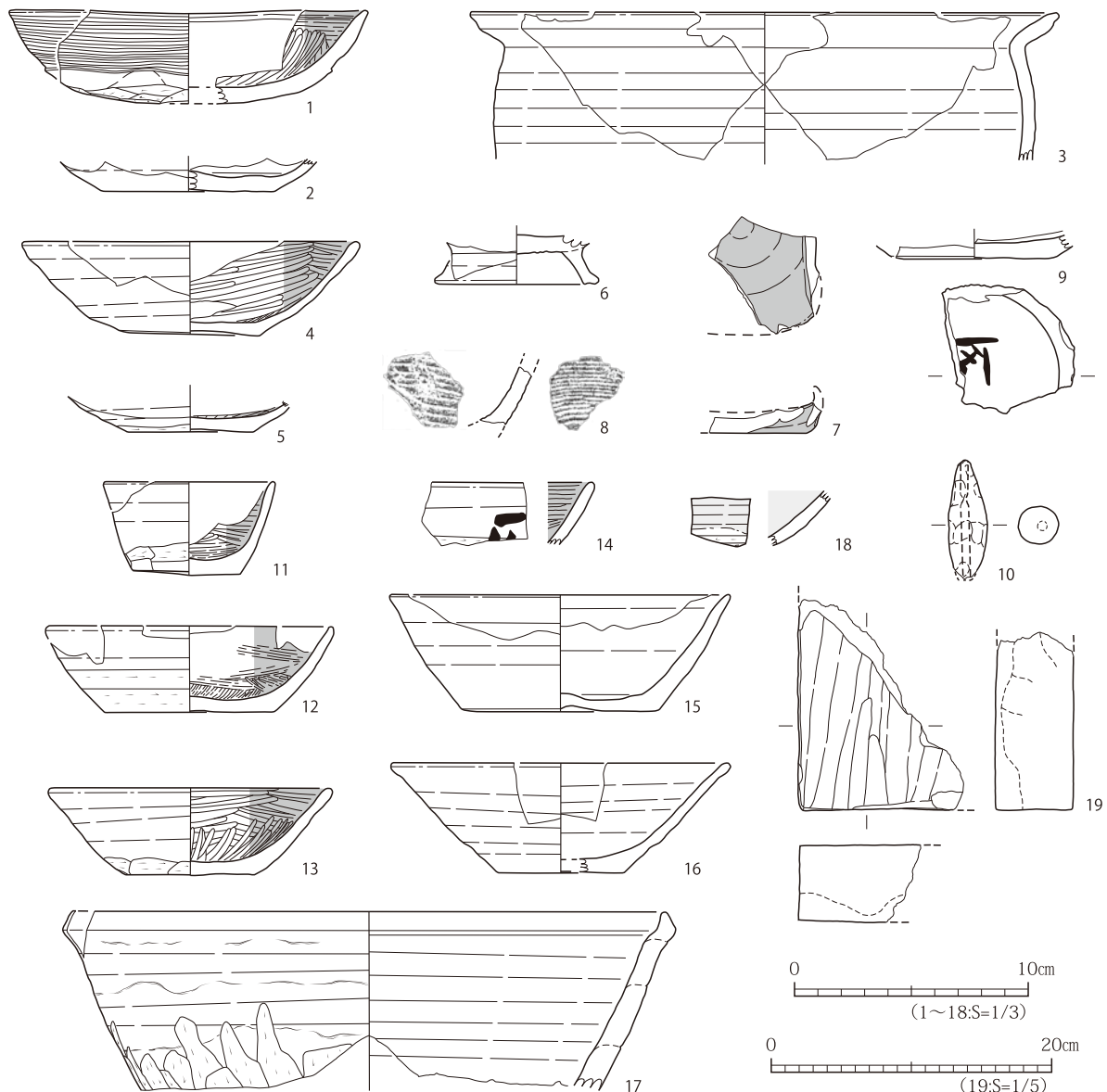
全体の平面形は判然としないが、東西方向に長い楕円形を呈すとみられる。規模は長軸が 6.0m 以上、短軸が 2.3m 以上で、深さは 0.3m である。断面形は皿状で、底面には凹凸がある。地山ブロックを多く含む暗灰黄色 (2.5Y4/2) や暗褐色 (10YR3/3) シルトで人為的に埋め戻されている。

遺物は出土していない。



断面写真 (北東から)

図版 12 SK3323 土壌



(単位:cm)

No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SX3290	土師器 環(非ロクロ)	2/5	(15.2)	—	4.0	有段丸底 外面:ヨコナデ、ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ、黒色処理	図版24-1	R1	B15873
2	SX2962	須恵器 環	底部のみ	—	(7.2)	(1.4)	底部:ヘラ切り無調整、板目状圧痕		R2	B15873
3	SA3292 E1	土師器 甕	1/4	(25.0)	—	(6.3)	外面:スス付着		R37	B15873
4	SD3304 堆	土師器 環	1/2	14.1	6.0	4.1	底部:回転糸切り無調整 内面:放射状ヘラミガキ、黒色処理	図版24-2	R4	B15873
5	SD3304 堆	土師器 環	底部のみ	—	5.4	(1.5)	底部~体部下端:回転糸切り→手持ちヘラケズリ 内面:放射状ヘラミガキ、黒色処理		R3	B15873
6	SD3304 堆	土師器 高台環or皿	底部のみ	—	(7.0)	(2.1)	底部:回転糸切り→高台貼付 内面:放射状ヘラミガキ、黒色処理		R5	B15873
7	SD3304 堆	土師器 耳皿	底部のみ	—	(5.6)	(1.3)	底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ 内外面黒色処理		R7	B15873
8	SD3304 堆	土師器 甕	底部のみ	—	—	—	内外面:ヨコハケ		R8	B15873
9	SD3304 堆	須恵器 環	底部のみ	—	(7.2)	(1.0)	底部:ヘラ切り→ナデ、墨書「全」	図版25-1	R333	B15873
10	SD3304 堆	土製品 土鏝	ほぼ完形	—	—	—	全長:(5.1cm) 最大径:1.7cm 孔径:0.4cm 重量:11.7g 外面:ナデ、オサエ		R451	B15873
11	SX3301	土師器 環	2/3	(8.2)	4.6	4.0	底部~体部下端:回転糸切り→手持ちヘラケズリ 内面:横方向ヘラミガキ、黒色処理		R43	B15873
12	SX3301	土師器 環	1/4	(12.0)	(7.2)	3.7	底部:回転糸切り→手持ちヘラケズリ 体部下端:回転ヘラケズリ 内面:横方向ヘラミガキ、黒色処理		R44	B15873
13	SX3301	土師器 環	1/4	(11.8)	(5.5)	3.7	底部~体部下端:回転糸切り→手持ちヘラケズリ 内面:放射状ヘラミガキ、黒色処理		R45	B15873
14	SX3301	土師器 環	口縁のみ	—	—	(2.7)	底部:回転ヘラケズリ、墨書 内面:ヘラミガキ	図版25-2	R352	B15873
15	SX3301	須恵器 環	1/3	(14.4)	8.4	6.0	底部:ヘラ切り→手持ちヘラケズリ		R47	B15873
16	SX3301	須恵系土器 環	1/4	(14.2)	5.5	4.7	底部:回転糸切り無調整		R48	B15873
17	SX3301	須恵系土器 鉢	口縁のみ	(25.2)	—	(7.6)	外面:ロクロナデ→手持ちヘラケズリ		R49	B15873
18	SX3301	灰釉陶器 埴	体部のみ	—	—	—	内外面:ハケ塗り		R384	B15873
19	SX3301	埴	一部のみ	—	—	—	全長:(15.5cm) 幅:(10.8cm) 厚:(5.5cm) 板状の粘土に複数の粘土塊を重ねて成形 ナデ	図版25-3	R426	B15877

図版 13 灰白色火山灰降下前の遺構出土遺物

ii 灰白色火山灰降下後の遺構

【SA3293 柱列跡】 (図版 4・6・14・15)

調査区北側の第7層上面で検出した東西4間以上の柱列跡で、西側は調査区の外へさらに延びる可能性がある。SX3301 整地層より新しく、SE3303 井戸より古い。方向は東で南に9°振れる。東端の柱穴P1で柱材を、東端から3間西の柱穴P4で柱痕跡を確認している。P1で残存する柱材は径0.32mで、長さ0.32m、厚さ0.08mの石製礎盤直上に乗る。規模は、柱材や柱痕跡、柱穴のほぼ中心で規模を推定すると、総長は9.3m以上で、柱間は東から(2.3)m、(2.0)m、(2.7)m、(2.4)mである。柱穴は、長軸0.4~0.8mの隅丸長方形で、掘方埋土は灰白色火山灰の小ブロックを含む黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土や、地山ブロック・炭化物を少量含む灰黄褐色(10YR4/2)シルトである。

遺物は掘方から土師器坏、須恵系土器坏が出土している。

【SE3302 井戸】 (図版 14・15)

調査区北東の第7層上面で検出した、曲げ物とその上部に石を積んだ石組みとみられる井戸である。SE3303 井戸より古い。

曲げ物は長軸1.5m、短軸1.1mの楕円形を呈す深さ0.6mの掘方に据えられており、さらにその上部の断面U字状を呈する掘方に、人頭大の垂円礫10個を円形に組んでいる。曲げ物は直径55cm、高さ35cmのもので、厚さは底板が2cm、側板が0.5cmである。掘方埋土は大きく上中下の3層に分かれ、下層が瓦片を多く含むオリーブ黒色(5Y3/1)土、中層が黄褐色ブロックを踏むオリーブ黒色(5Y3/2)土、上層が炭化物を含む黒色(2.5Y2/1)土である。残存する円礫上端からの深さは最大で0.7mである。井戸枠内の堆積土はいずれも自然堆積土で、1層が炭化物を含む黒色(2.5Y2/1)シルト、2・3層がオリーブ黒色(5Y1/3)シルトで、2層は黄褐色土小ブロックを含む。

遺物は掘方埋土から土師器坏・高台坏または皿・甕、須恵器高台坏・甕、須恵系土器坏・高台坏または皿、瓦、動物遺存体が出土している。瓦は丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類があり、平瓦ⅠA類はaタイプ、ⅡB類はaタイプ2・bタイプ1がある。動物遺存体にはシカの中足骨がある。井戸枠内堆積土からは土師器甕、須恵器甕、須恵系土器坏・皿・高台皿、瓦が出土し、瓦には丸瓦、平瓦ⅠA・ⅡB類がある。遺構確認面からは土師器坏、須恵器坏・長頸瓶、須恵系土器坏・皿、瓦、木製品が出土した。瓦には丸瓦、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類がある。

【SE3303 井戸】 (図版 14・15)

調査区北東の第7層上面で検出した素掘りの井戸である。SE3302 井戸、SB3293 柱列跡より新しく、SD3316 溝より古い。

規模は長軸1.7mの楕円形で、深さ0.95mである。堆積土は5層に分かれ、1層が黒褐色(7.5YR3/1)のスクモ層、2・5層が砂を含む暗オリーブ灰色(5GY1/3)シルト、3層が砂を少量含む黒色(10Y2/1)シルト、4層が黒色(7.5Y2/1)粘土で、いずれも自然堆積土である。

遺物は堆積土から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・蓋・高台坏・長頸瓶・甕、須恵系土器坏・小

皿・高台坏または皿、製塩土器、瓦、動物遺存体が出土した。瓦には丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類があり、動物遺存体にはシカの肋骨がある。

【SD3296 小溝群】 (図版 14・16)

調査区南東の第7層上面で検出した。北西から南東方向にほぼ等間隔で平行し、断面形・堆積土が類似する3本の溝からなる。SK3331土壌より新しい。検出した範囲は南北3.5m、東西9.0m以上で、東側は調査区外へさらに延びる。各小溝の間隔は1.4～1.8mで、方向は発掘基準線に対して東で南に30°振れる。小溝の規模は最も長いもので長さが最大6.7m以上、幅が0.3m前後、深さが0.08mで、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は灰色(5GY3/1)粘土の小ブロックを少量含む暗オリーブ灰色(5GY4/1)のシルト質砂で、自然堆積土である。

遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・甕、須恵系土器坏・高台坏が出土している。

【SD3297 小溝群】 (図版 14・16)

調査区南東の第7層上面で検出した。北西から南東方向にほぼ等間隔で平行し、断面形・堆積土が類似する3本の溝からなる。SK3331土壌より新しい。検出した範囲は南北8.6m以上、東西3.6mで、東側は調査区外へさらに延びる。各小溝の間隔は1.3～2.1mで、方向は発掘基準線に対して東で南に29°振れる。小溝の規模は最も長いもので長さが8.1m以上、幅が約0.8m、深さが0.1mで、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は灰色(5GY3/1)粘土の小ブロックを少量含む暗オリーブ灰色(5GY4/1)の砂質シルトで、自然堆積土である。

遺物は土師器坏・埴・甕、須恵器坏・長頸瓶・甕、須恵系土器坏・皿・高台坏または皿・高台鉢、瓦、土製品がある。瓦は丸瓦・平瓦があり、土製品には土錘がある。

【SD3298 小溝群】 (図版 4・14)

調査区南東の第7層上面で検出した。北西から南東方向にほぼ等間隔で平行し、断面形・堆積土が類似する3本の溝からなる。他遺構との重複は無い。検出した範囲は、南北2.6m、東西1.8m以上で、東側は調査区外へさらに延びる。各小溝の間隔は1.1～1.3mで、方向は発掘基準線に対して東で南に13°振れる。小溝の規模は最も長いもので長さが1.8m以上、幅が0.3m前後、深さが0.4mで、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は地山小ブロックと炭化物を含むオリーブ黒色(5GY3/2)砂質シルト層で、自然堆積土である。

遺物は出土していない。

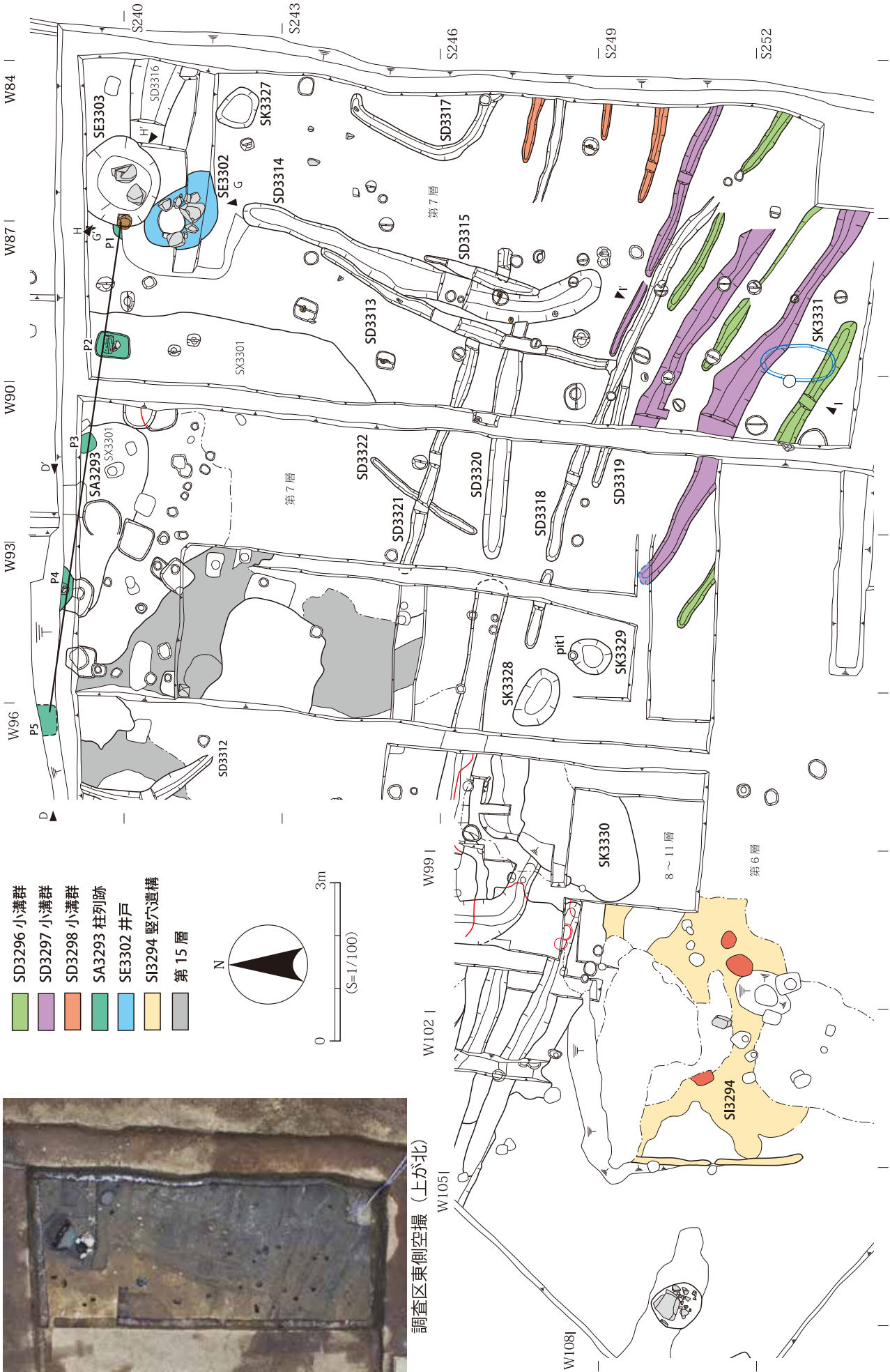
iii 灰白色火山灰との関係が不明な遺構

【S13294 竪穴遺構】 (図版 14)

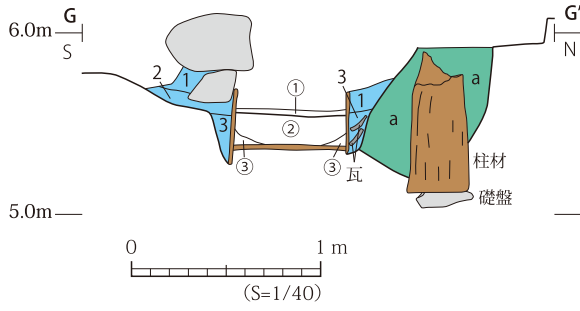
調査区南東の第8～11層上面で検出した竪穴遺構である。床面で焼け面3ヶ所を確認しており、鍛冶遺構などの工場の可能性がある。全体に削平を受けており、また精査を実施していないため詳細は



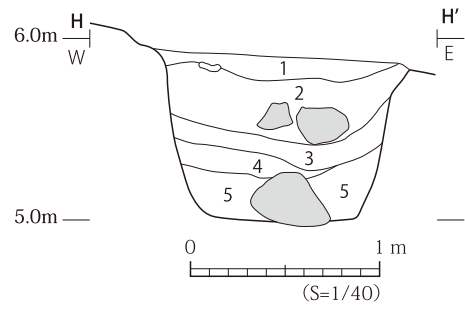
調査区東側空撮 (上が北)



図版 14 灰白色火山灰降下後の遺構



SE3302 断面図



SE3303 断面図



SE3302・SA3293P1 断面 (東から)



SE3302・3303 (南西から)

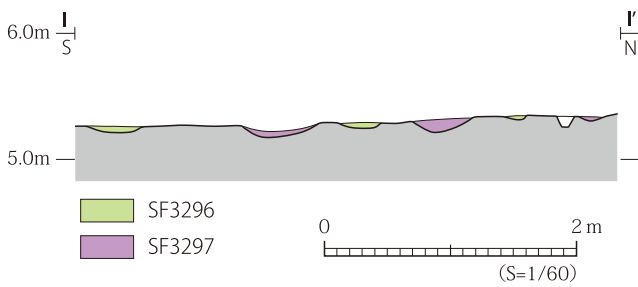


SE3302 (北西から)



SE3302 井戸枠使用曲げ物 (北西から)

図版 15 SE3302・3303 井戸

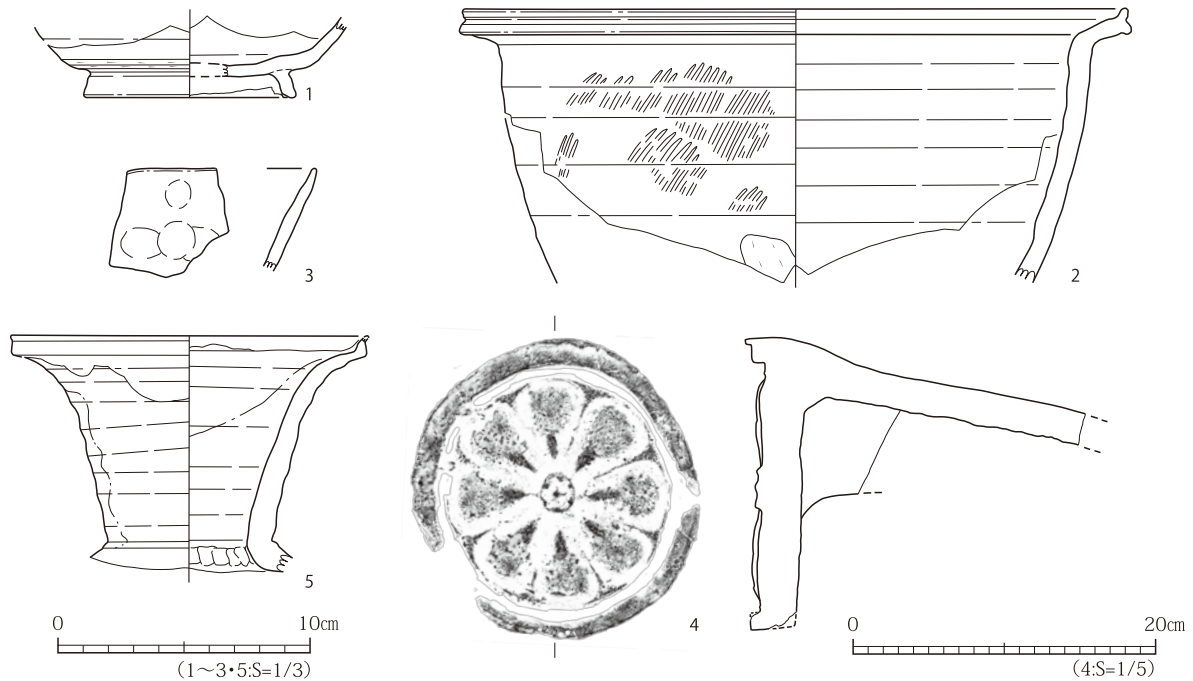


SD3296・3297 断面図



各小溝群 (南から)

図版 16 SD3296・3297 小溝群



(単位:cm)										
No.	出土遺構	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SK3330	須恵器 高台坏	底部のみ	—	(8.2)	(3.2)	底部：回転ヘラケズリ→高台貼付 体部下端：回転ヘラケズリ		R28	B15873
2	SK3330	須恵器 鉢	1/4	(26.2)	—	(10.9)	外面：平行タタキ→ロクロナデ→手持ちヘラケズリ		R30	B15873
3	SK3330	製塩土器 鉢	口縁のみ	—	—	(4.3)	内外面：オサエ 厚:0.3~0.5cm		R441	B15873
4	SK3330	軒丸瓦	瓦当のみ	—	—	—	重弁蓮花文431 瓦当径:19.7cm 瓦当厚:2.6cm 瓦当裏面:ヘラケズリ→ナデ		R404	B15877
5	Pit1	須恵器 長頸瓶	口頸部のみ	(14.0)	(9.3)	—	頸部基部に突帯 頸部は太く口縁部は大きく外反 大戸窯産 (KA112号窯式)	図版24-4	R281	B15873

図版 17 SK3330・pit 出土遺物

不明だが、西側の周溝と床面とみられる掘方埋土の広がりを確認し、床面上では焼面を検出した。平面形・規模は南北 3.7m 以上、東西 5.1m 以上の東西に長い長方形で、西辺の方向は発掘基準線にほぼ揃う。掘方埋土は地山ブロックを主体とした黒褐色(10YR3/2)シルトで、南北 3.3m、東西 4.9m の範囲に広がる。焼面はいずれも長軸 0.35~0.50m の楕円形で、上面が橙色(5YR6/6)に硬化している。周溝は長さ 3.3m 以上、幅 0.2m で、堆積土は灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

【SK3330 土壌】(図版 14・17)

調査区中央西側の第 8~11 層上面で検出した。SX2962 通路跡より新しく、SD3311 溝より古い。平面形は南北方向に長い楕円形で、規模は長軸 3.1m、短軸 1.9m 以上である。深さは 0.35m で、断面形は皿状を呈する。堆積土は底面近くに炭化物を多く含むにぶい黄褐色(2.5Y4/2)シルトで、自然堆積土である。

遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏(図版 17-1)・鉢(2)・甕、製塩土器(3)、瓦、鉄滓が出土している。1 は底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。2 は口縁部から底部にかけて胴部がややすぼまる形態を呈す。3 は器壁が薄く、内外面オサエである。瓦には軒丸瓦・丸瓦・平瓦があり、軒丸瓦は重弁蓮花文の 431(4)がある。丸瓦はⅡB類、平瓦はⅠA・ⅡB・ⅡC類、平瓦ⅡB瓦ⅡB類には a タイプ 2 がある。

B 中世以降の遺構

調査区北東でSG3164池を、西側を中心に溝7(註3)と土壌1を検出している。

【SG3164池】(図版3・4・27)

調査区北東の第3層上面で、第86次調査で検出した東西に長いSG3164池の南西端を検出した。第86次調査と合わせた東西の長さは、21.2m以上となる。今回は、南西隅のへりを検出したに過ぎないため詳細な形状は不明だが、東西3.2m、南北7.5mの範囲を確認した。深さは最大0.3mで、断面形は浅い皿状を呈す。堆積土は炭化物を少量含む黄灰色(2.5Y5/1)シルトで、自然堆積土である。

遺物は出土していない。

C 基本層序出土の遺物

【第8層以下の出土遺物】(図版18・20・21)

第13層から、土師器甕が出土しており、非ロクロ整形(図版18-1)で頸部に段をもつ。

第8～11層から、土器、瓦、木製品、植物遺存体、動物遺存体、鉄滓が出土した。土器には土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器があり、土師器には坏・蓋・埴・甕、南小泉式の高坏がある。坏(図版18-6・7)は底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリで、内面底部には横方向へ密なヘラミガキが施される。また底部に記号「×」(図版21-11)や文字(12)の刻書を確認できるものがあり、いずれも焼成前にヘラ書きされている。甕はロクロ整形(図版18-8・9)のものがあり、ロクロ整形後ヘラケズリのもの、平行タタキの施されるものがある(9)。須恵器は坏・蓋・高台坏・稜埴・盤・高盤・長頸瓶・鉢・甕がある。坏は底部回転糸切り後手持ちヘラケズリのもの(2・11)、ヘラ切り無調整のもの(12)、回転糸切り無調整のもの(13・15)があり、切り離し後渦巻き状に沈線が施されるものもある(10)。また底部には墨書を確認できるものがあり、文字が判読できるものとして、「今岡」(図版21-1)、「全」(3)、「新」(4)、「征」(5)がある。蓋(図版18-14)は内外面ともにヘラミガキが施される。稜埴(16)には漆の付着するものが認められる。高盤(5)は脚部基部の4カ所に穿孔が認められる。長頸瓶(17)は胎土の特徴から大戸窯産であり、高台外端が下方へ突出した台形状を呈し、胴部下半に坏状の焼台接地痕が残る。灰釉陶器には埴がある。

瓦は軒丸瓦、丸瓦、平瓦、塼があり、軒丸瓦は重弁蓮花文(型番不明)である。丸瓦はⅡ・ⅡB類や刻印「占」、平瓦はⅠA・ⅡA・ⅡB・ⅡC類があり、平瓦ⅠA類はaタイプ、ⅡB類はaタイプ1・3がある。塼(図版20-15)はⅠB類で、板状の粘土に複数の粘土塊を重ね、それらを押圧して成形している。表面はヘラケズリ後ナデ調整であるが、側面には板目状の圧痕が残る。

木製品は檜扇、挽物皿、箸、曲げ物、箱、刺突具がある。檜扇(図版22・裏表紙写真)は11本の骨からなり、全長はもつとも残りの長い部分で28.5cmである。全ての骨の下端には直径約4mmの要孔があり、表裏面にはそれぞれ墨書が確認できる。

植物遺存体にはクルミの種子があり、動物遺存体にはシカの肋骨・歯、ウマの歯・中手骨もしくは中足骨、ウマもしくはウシの骨がある。

【第1～7層の出土遺物】（図版19～22）

土器、陶磁器、瓦、漆紙文書、木製品、土製品、石製品、動物遺存体、鉄滓が出土しており、特徴的なもののみを図示した。土器には土師器、須恵器、須恵系土器、手捏ねかわらけ、製塩土器があり、土師器は坏・埴・耳皿（図版20-1）・高台坏・高台埴・高台皿・高坏・壺（図版19-12）・甕（図版19-2）・甗（図版19-3・4、図版20-10）がある。坏は底部に墨書を確認できるものがあり、文字が判読できるものとして則天文字の「天」（図版21-6）、「行」（8）がある。壺は灰釉陶器小瓶を模倣したものと考えられる。甕はヘラケズリ後平行タタキが施される。須恵器には坏（図版19-5・6）・高台坏・双耳坏（図版20-2）・蓋・盤・高盤・硯（図版19-9、図版20-9）・長頸瓶（図版19-1・7・8・14・15）・鉢・甕があり、胎土の特徴から大戸窯産（図版19-1・5・7・8・14・15）や常陸産（6）の可能性が高い資料も認められる。坏は底部に墨書・刻書を確認できるものがあり、前者は文字が判読できるものに「客」（図版21-9）がある。後者は焼成前に文字（13）がヘラ書きされている。硯は風字硯と猿面硯があり、後者（図版20-9）は甕胴部を隅丸方形に加工し、底面から側面にかけて漆を塗って木製の脚部を接着している。須恵系土器は坏・小皿（図版20-3）・皿（図版20-4）・高台坏・高台埴・高台皿・高台鉢・高坏（図版20-5）・三足土器（図版19-16）があり、皿は体部に1か所穿孔されている。そのほか裾部の広がる柱状高台（図版20-11）もみられる。手捏ねかわらけには皿（図版19-13）があり、製塩土器（10）は器壁が厚さ1cmを超える厚手のものである。

漆紙文書（図版23-1）は土師器坏内面に付着しており、4行分の文字を確認できる。文書末尾の日付・署名部分の断簡で、3行目は書生の署名、4行目は残画から判断して「館」または「鑑」の可能性はある。出納にかかわる文書とみられる。

陶磁器には灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、青白磁、中近世陶器がある。灰釉陶器には埴（図版19-17）・深埴（図版20-7）・皿（6）・瓶（図版19-18）、緑釉陶器には埴がある（図版19-19）。灰釉陶器深埴と緑釉陶器埴は東濃産の可能性があり、前者は猿投系施釉陶器編年でⅦ期新段階（虎溪山1号窯式併行、980～1010年頃）、後者はⅦ期古段階（大原2号窯式併行、920～950年頃）に位置づけられる（尾野2003・2008）。白磁には碗・輪花碗（図版20-12）・皿（図版19-20）があり、輪花碗は太宰府市分類Ⅰ類（A期、8世紀末～10世紀中葉）、皿はⅣまたはⅤ類（C期、11世紀後半～12世紀前半）と考えられる（太宰府市教育委員会2000）（註4）。青白磁には合子（図版20-8）がある。

瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼、近世瓦がある。軒丸瓦には細弁蓮華文310B（図版20-13）があり、裏面は硯に転用されている。軒平瓦には単弧文640a（14）がある。丸瓦にはⅡ・ⅡB類や刻印「伊」、平瓦はⅠA・ⅠC・ⅡA～C類や刻印「丸」A、押印「○」があり、平瓦ⅠA・ⅡB類には各々a・bタイプのものである。塼（16）はⅠB類で、粘土板を2枚重ねて成形しており、器面はヘラケズリ後ナデ調整であるが、側面の一部には板目状の圧痕が残る（註5）。

木製品は刳物、燃えさし、土製品には土錘（図版19-11）、羽口、石製品には砥石、動物遺存体にはウマの歯・部位不明の骨、シカの骨、ウマもしくはウシの骨がある（註6）。

【註】

- 註1 第7層上面で検出した遺構については、本調査区のみでは古代に限定することができないが、第86次調査区の第7層上面検出遺構が上層出土遺物の年代をもとに古代のものでされていること、本調査区第6層出土遺物が手捏ねかわらけをわずかに含むものの、主体が須恵系土器であることをふまえ、古代の遺構である可能性が高いと考えた。
- 註2 第81次調査では、SX2962盛土遺構に後続するSX2968盛土遺構を検出していたが、第86次調査時に両者をSX2962盛土遺構に統一している（『年報2013』）。
- 註3 調査区西側表土直下の第16層（地山）上面で検出したSD3310・3311・3332・3333・3334溝、SK3326土壇は、一部第6層上で検出したSD3309溝と堆積土や検出状況に共通性が認められるため、SD3309溝と同様に第6層より新しい遺構と判断し、ここに含めた。なお、これらの遺構から中世以降の遺物は出土していない。
- 註4 施釉陶器の産地・年代については、京都市埋蔵文化財研究所平尾政幸氏、奈良文化財研究所尾野善裕氏にご教示頂いた。
- 註5 今回の調査では、SX3301/1点、11層/1点、8～11層/2点、7層/4点、6・7層/1点、6層/1点で合計11点出土している。周辺では第61次調査（『年報1992』）、第81次調査（『年報2009』）で出土しているが、それぞれ1点のみの出土で異なる出土状況を示している。なお出土した埴のなかには、側面に板状の圧痕が残るものが認められる。平城宮第一次大極殿出土埴（奈良文化財研究所2011）や武蔵国分寺へ瓦を供給した東京都稲城市瓦谷戸窯跡群出土埴（瓦谷戸窯跡群調査団1999）では、押圧などの痕跡から型枠を用いて製作したと考えられている。今回出土した埴についても、側面の板目状圧痕や粘土の押圧痕から、類似した製作技法によってつくられた可能性がある。
- 註6 動物遺存体の同定については、奥松島縄文村歴史資料館長菅原弘樹氏にご教示頂いた。

【参考文献】

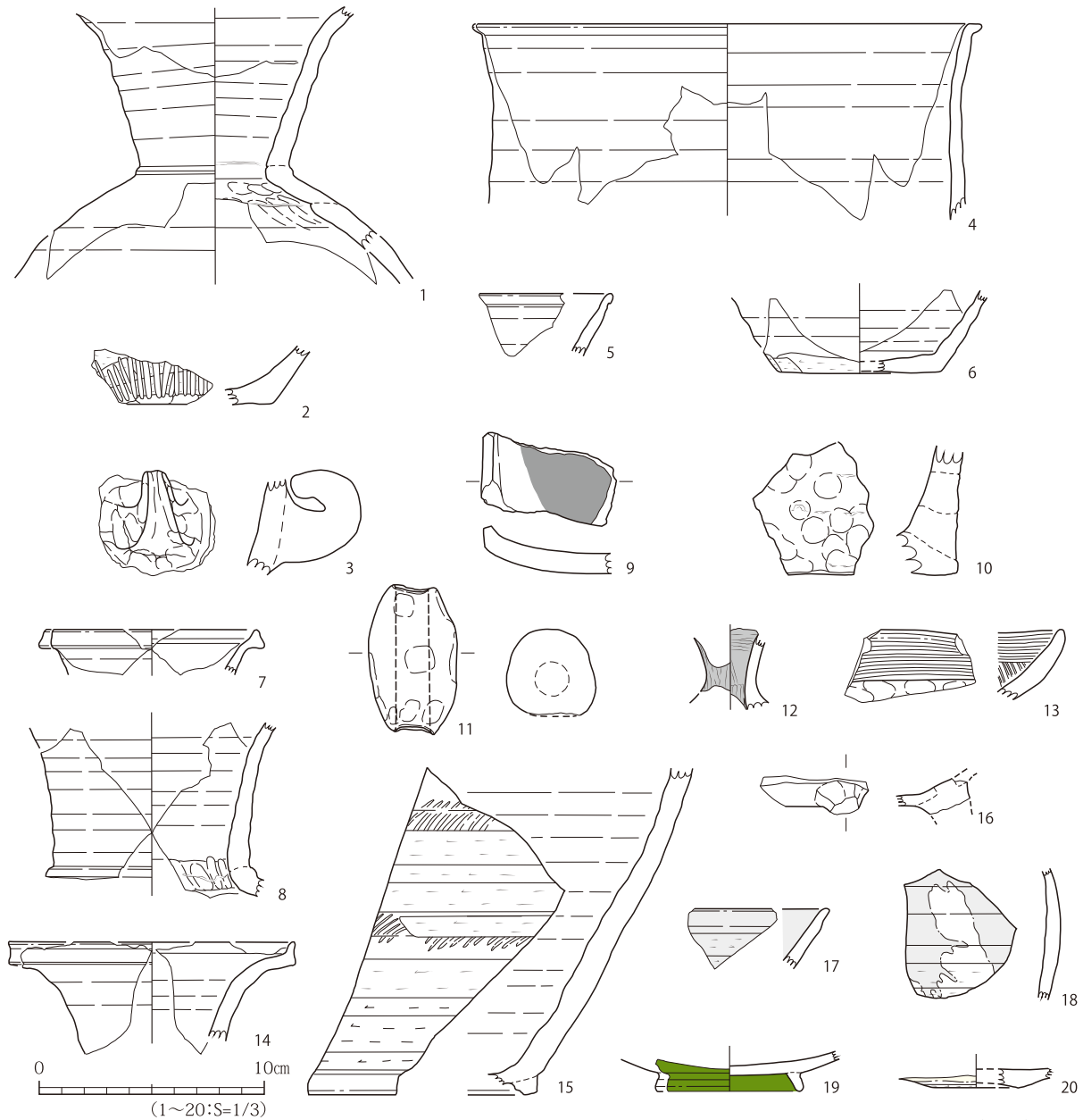
- 尾野善裕 2003 「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会第7回シンポジウム pp. 20-37
- 尾野善裕 2008 「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集 pp. 75-92
- 瓦谷戸窯跡群調査団 1999 『瓦谷戸窯跡群発掘調査報告書』
- 太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
- 奈良文化財研究所 2011 『平城宮発掘調査報告XVII』奈良文化財研究所学報第84冊



(単位:cm)

No.	層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	13層	土師器 甕(非ロクロ)	口縁のみ	(32.4)	—	(6.4)	外面:ヨコナデ、頸部に段あり 内面:ヨコハケ→ヨコナデ	図版24-5	R51	B15874
2	11層	須恵器 坏	1/2	(9.0)	5.2	4.3	底部~体部下端:回転糸切り→手持ちヘラケズリ		R53	B15874
3	11層	須恵器 高台坏	1/4	(13.2)	—	(4.4)	底部:ナデ→高台貼付体部下端:回転ヘラケズリ		R55	B15874
4	11層	須恵器 稜塊	1/4	(15.0)	—	(6.1)	底部:回転ヘラケズリ→高台貼付	図版24-6	R54	B15874
5	11層	須恵器 高盤	脚部のみ	—	—	—	脚部基部に2方向から十字に穿孔し、孔入口周辺をヘラケズリ 脚部内面に絞り目	図版24-7	R56	B15874
6	8~10層	土師器 坏	2/5	(12.4)	6.6	5.5	底部~体部下端:回転ヘラケズリ 内:横方向ヘラミガキ、黒色処理		R57	B15874
7	8~10層	土師器 坏	1/3	(10.4)	6.1	4.4	底部~体部下端:回転ヘラケズリ 内:横方向ヘラミガキ、黒色処理		R58	B15874
8	8~10層	土師器 甕	1/5	(20.6)	—	(14.8)	外面:平行タタキ→ロクロナデ→ヘラケズリ、スス付着		R60	B15874
9	8~10層	土師器 甕	底部のみ	—	—	(2.5)	外面:ヘラケズリ→平行タタキ 内面:ナデ 会津型		R76	B15874
10	8~10層	須恵器 坏	底部のみ	—	(8.0)	(1.3)	底部:ヘラ切り→渦巻き状に沈線		R64	B15874
11	8~10層	須恵器 坏	2/3	(8.0)	4.6	4.2	底部~体部下端:回転糸切り→手持ちヘラケズリ		R63	B15874
12	8~10層	須恵器 坏	1/5	(12.8)	(7.2)	3.9	底部:ヘラ切り→ナデ		R61	B15874
13	8~10層	須恵器 坏	2/5	(13.2)	7.1	3.6	底部:回転糸切り無調整		R62	B15874
14	8~10層	須恵器 蓋	口縁のみ	—	—	(2.5)	内外面:ロクロナデ→ヘラミガキ		R67	B15874
15	8~11層	須恵器 坏	1/4	(13.2)	4.9	(6.4)	底部:回転糸切り無調整		R70	B15874
16	8~11層	須恵器 稜塊	体部のみ	—	—	—	底部:回転ヘラケズリ、爪形痕 内面:漆付着		R71	B15874
17	8~11層	須恵器 長頸瓶	底部のみ	—	(8.2)	(5.0)	底部:ナデ 胴部:回転ヘラケズリ、坏形燒台接地痕 大戸窯産(MH19~KA107号窯式)	図版24-8	R283	B15874

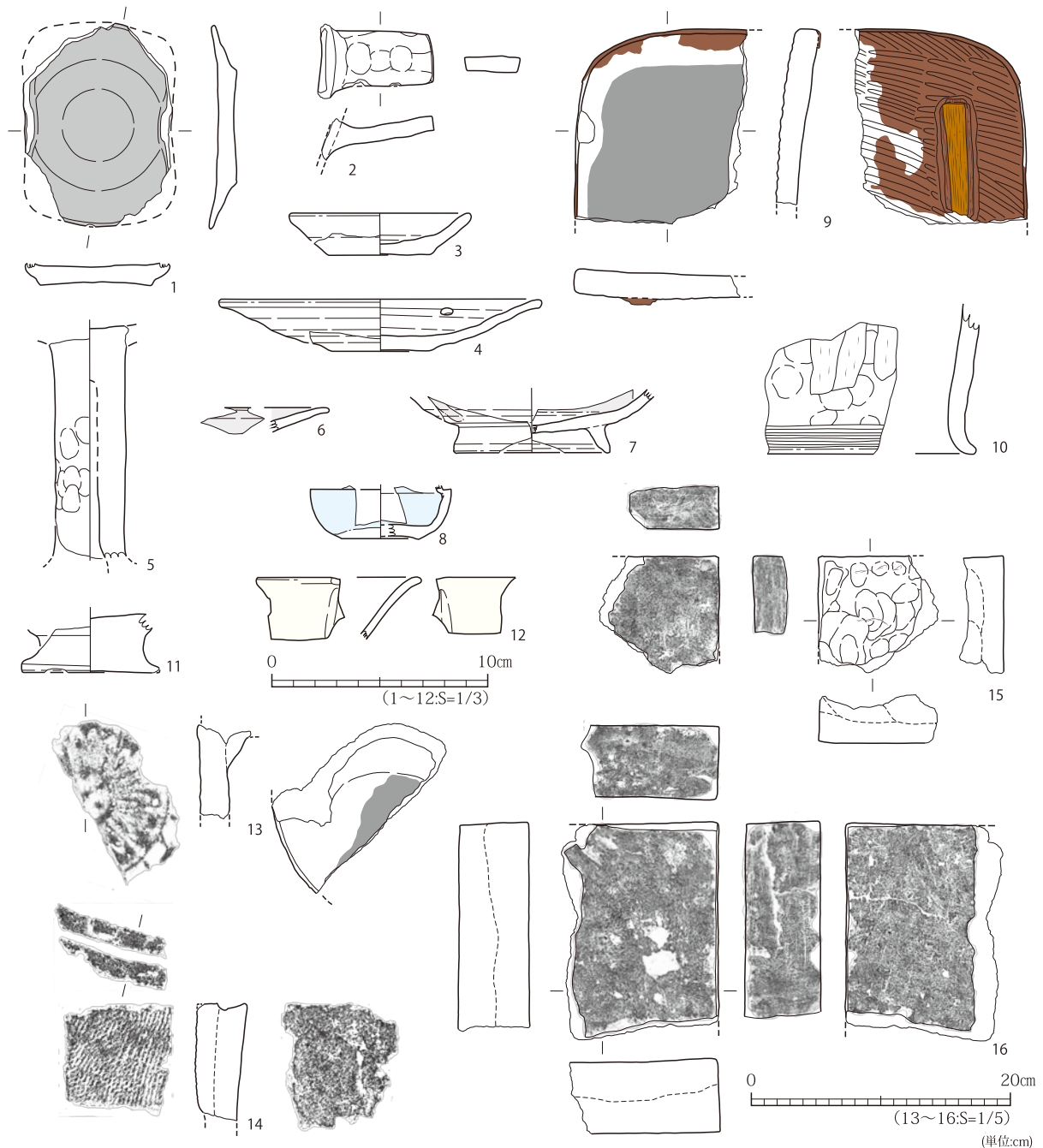
図版 18 第 8 ~ 13 層出土遺物



(単位:cm)

No.	層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	7~11層	須恵器 長頸瓶	頸~胴部	—	—	—	頸部2段構成 頸部突帯 頸部太く口縁部大きく外反 大戸窯産 (KA112号窯式)		R285	B15875
2	7~11層	土師器 甕	底部のみ	—	—	(2.6)	外面:ヘラケズリ→平行タタキ 底部:平行タタキ 会津型	図版24-9	R83	B15875
3	7層	土師器 甕	把手のみ	—	—	—	鉤手状 ナデ	図版24-10	R149	B15875
4	7層	土師器 甕	口縁のみ	(22.4)	—	(8.7)	—		R113	B15875
5	7層	須恵器 坏	口縁のみ	—	—	(2.8)	大戸窯産		R289	B15875
6	7層	須恵器 坏	1/5	—	(7.2)	(3.7)	底部:一方向手持ちヘラケズリ 体下端:手持ちヘラケズリ 胎土:白雲母多量 常陸産	図版24-11	R142	B15875
7	7層	須恵器 長頸瓶	口縁のみ	(9.4)	—	(2.0)	口縁部外反 大戸窯産 (MH19~KA107号窯式)		R287	B15875
8	7層	須恵器 長頸瓶	頸部のみ	—	—	—	頸部突帯 頸部太い 大戸窯産 (KA112号窯式以降)		R288	B15875
9	7層	須恵器 風字碗	破片のみ	—	—	—	側端部:ヘラケズリ 底面:ナデ		R321	B15875
10	7層	製塩土器 鉢	底部のみ	—	—	(5.8)	外面:オサエ 内面:ナデ 厚:1.3~2.1cm		R444	B15875
11	7層	土製品 土錘	ほぼ完形	—	—	—	全長:6.7cm 最大径:3.9cm 孔径:1.4cm 重量:89.4g ナデ		R453	B15875
12	6・7層	土師器 瓶	頸部のみ	—	—	—	内外面:ヘラミガキ、黒色処理		R178	B15875
13	6・7層	手捏ねかわらけ 皿	口縁のみ	—	—	(3.1)	外面:ヨコナデ、オサエ 内面:ナデ		R229	B15875
14	6・7層	須恵器 長頸瓶	口縁のみ	(12.6)	—	(5.0)	口縁部大きく外反し端部をつまみあげる 大戸窯産 (KA112号窯式)		R295	B15875
15	6・7層	須恵器 長頸瓶	底部のみ	—	—	(14.5)	高台:逆台形状 胴部平行タタキ→ロクロナデ→回転ヘラケズリ 大戸窯産		R296	B15875
16	6・7層	須恵系土器 三足土器	底部のみ	—	—	—	体部を穿孔し脚部を挿入		R211	B15875
17	6・7層	灰釉陶器 壺	口縁のみ	—	—	(2.7)	内外面:施釉 尾張or東濃産		R387	B15875
18	6・7層	灰釉陶器 瓶	胴部のみ	—	—	—	外面:ハケ塗り 東濃産		R389	B15875
19	6・7層	緑釉陶器 壺	底部のみ	—	(7.0)	(2.9)	貼付高台 高台は細長い平行四辺形状で端部丸い 東濃産? 尾野編年VII期古段階 (920~950年頃)	図版24-12	R381	B15875
20	6・7層	白磁 皿	底部のみ	—	(3.6)	(0.9)	体部下端露胎 太宰府市分類III or V類 (C期、11世紀後半~12世紀前半)		R393	B15875

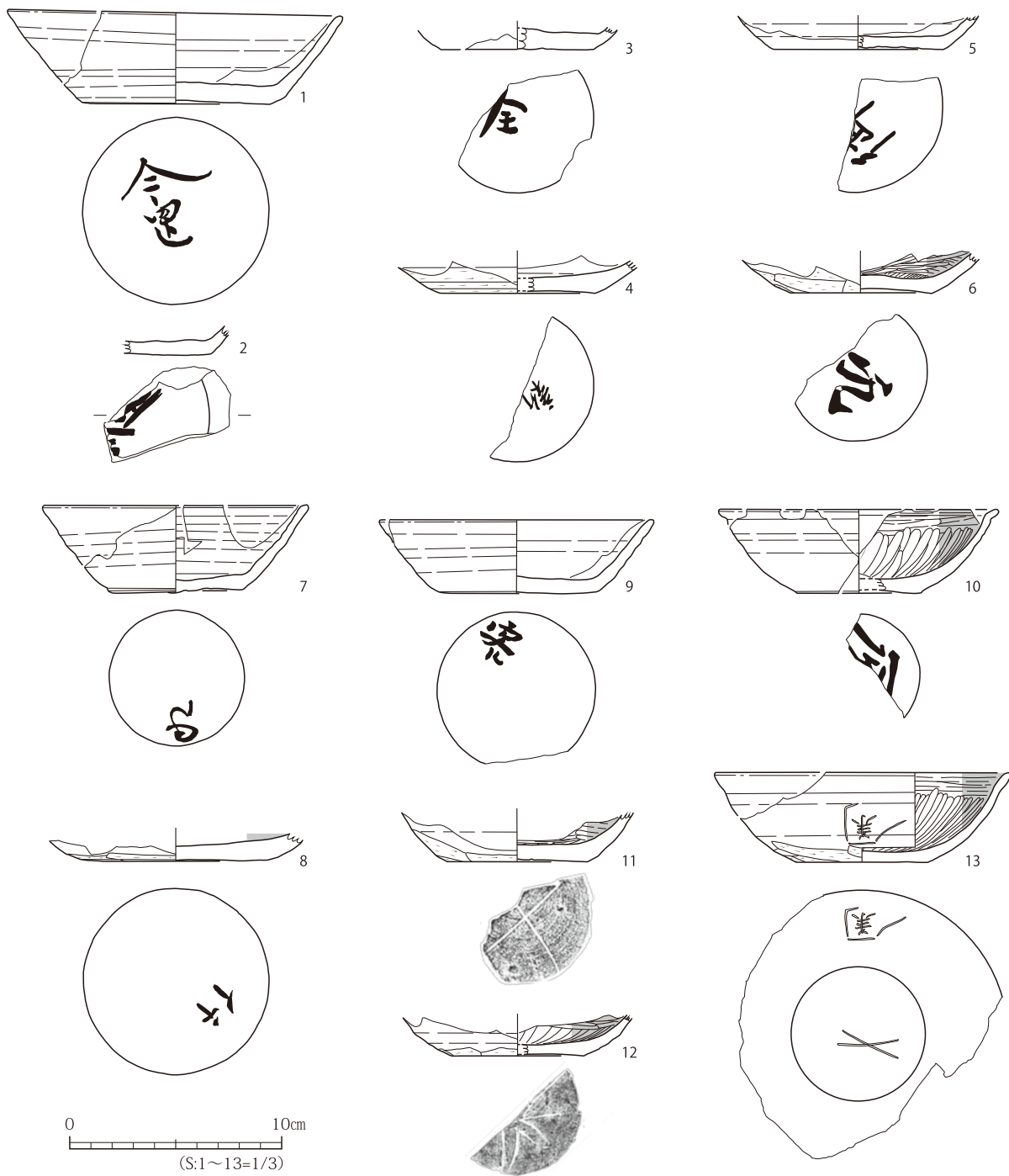
図版 19 第6~11層出土遺物



No.	層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	6層	土師器 耳皿	2/3	9.4	5.2	1.3	底部:回転系切り無調整 内外面:黒色処理		R231	B15875
2	6層	須恵器 双耳環	耳部のみ	—	—	—			R244	B15875
3	6層	須恵系土器 小皿	2/3	(8.2)	4.8	1.9	底部:回転系切り無調整		R250	B15875
4	6層	須恵系土器 皿	2/5	(14.6)	4.8	2.4	底部:回転系切り無調整 体部1か所に穿孔		R237	B15875
5	6層	須恵系土器 高杯	脚部のみ	—	—	—	外面:オサエ		R251	B15875
6	6層	灰釉陶器 皿	口縁のみ	—	—	(1.2)	内外面:施釉 東海産		R390	B15875
7	1~6層	灰釉陶器 深碗	底部のみ	—	(7.0)	(2.9)	内外面:漬け掛け 高台三角形状で端部内面くぼむ 底部ナデ 東濃産? 尾野編年VII期新段階(980~1010年頃)	図版24-15	R391	B15875
8	1~6層	青白磁 合子	1/3	—	(3.6)	(2.4)	体部下端露胎 太宰府市分類C~D期(11世紀後半~12世紀後半)	図版24-14	R394	B15875
9	1~6層	須恵器 猿面硯	一部のみ	—	—	—	全長:(9.4cm) 幅:(8.0cm) 斐胴部片を隅丸方形に加工、漆で木製の脚部を接着	図版24-13	R331	B15875
10	1層	土師器 甌	底部のみ	—	—	—	外面:ヘラケズリ 内面:ナデ		R264	B15875
11	1層	須恵系土器 柱状高台	底部のみ	—	(6.2)	(2.7)	裾部広がる	図版24-16	R266	B15875
12	遺構確認	白磁 輪花碗	口縁のみ	—	—	(2.9)	口縁端部を切り欠き、体部をヘラで押圧して輪花つくりだす 太宰府市分類1類 (A期、8世紀末~10世紀中葉)	図版24-17	R395	B15875

No.	出土層位	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
13	6・7層	軒丸瓦	瓦当のみ	—	—	2.2	細弁蓮花文310B 瓦当裏面は転用硯として使用		R409	B15877
14	7層	軒平瓦	瓦当のみ	—	—	3.6	単弧文640a 頸面:縦位縄タタキ 凹面:ナデ		R413	B15877
15	8~11層	埴	一部のみ	(9.2)	(9.0)	(3.7)	板状の粘土に複数の粘土塊を重ねて押圧して成形 表面:ヘラケズリ→ナデ 側面:板目状圧痕→ナデ		R424	B15877
16	7層	埴	一部のみ	(16.1)	(12.2)	5.9	粘土板を2枚を重ねて成形 表面:ヘラケズリ→ナデ 側面:板目状圧痕→ヘラケズリ→ナデ		R427	B15877

図版 20 第1~6層出土遺物・瓦・埴



(単位:cm)

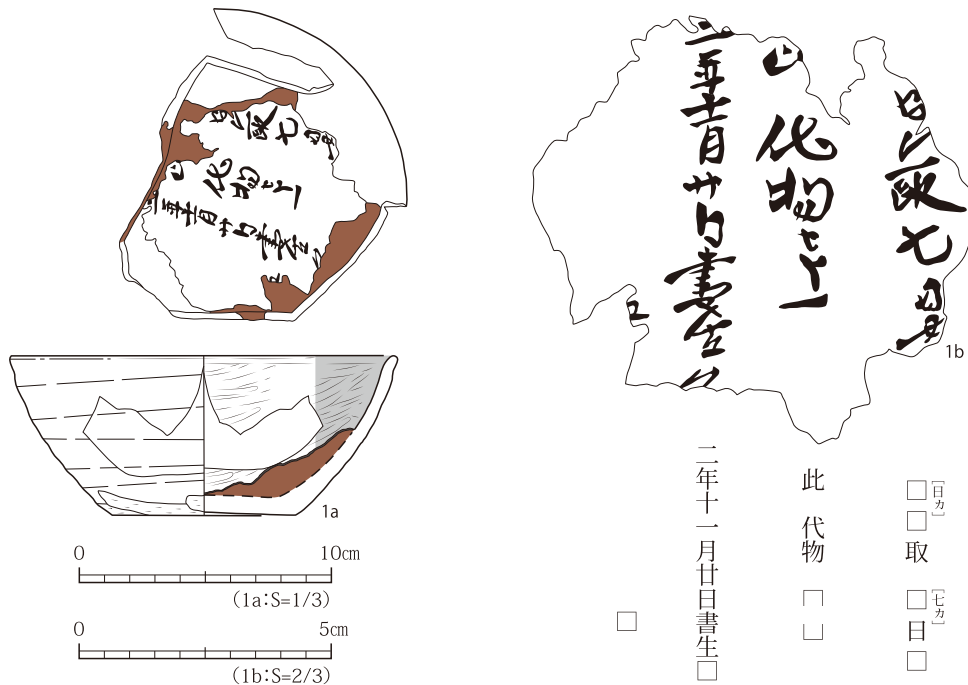
No.	層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	11層	須恵器 坏	2/3	(15.6)	8.8	4.4	底部:回転糸切り無調整 墨書:「今岡」	図版25-3	R336	B15876
2	11層	須恵器 坏	底部のみ	—	—	(1.4)	底部:へら切り→ナデ 墨書:「□〔厨カ〕」	図版25-4	R335	B15876
3	8・9層	須恵器 坏	底部のみ	—	7.0	(0.9)	底部:へら切り→ナデ 墨書:「全」	図版25-5	R339	B15876
4	8・9層	須恵器 坏	底部のみ	—	(7.2)	(1.8)	底部:回転へらケズリ 墨書:「新」	図版25-6	R340	B15876
5	8・9層	須恵器 坏	底部のみ	—	(8.0)	(1.6)	底部:へら切り無調整 墨書:「征」	図版25-7	R337	B15876
6	7~11層	土師器 坏	底部のみ	—	6.6	(1.9)	底部~体部下端:回転糸切り→ナデ 墨書:「天」	図版25-8	R345	B15876
7	7~11層	須恵器 坏	2/3	(12.4)	6.4	4.1	底部:へら切り無調整 墨書:「□」	図版25-9	R346	B15876
8	7層	土師器 坏	底部のみ	—	8.8	(1.3)	底部~体部下端:回転糸切り→手持ちへらケズリ 内面:放射状へらミガキ、黒色処理 墨書:「行」	図版25-10	R357	B15876
9	7層	須恵器 坏	1/2	(12.8)	7.4	3.5	底部:回転糸切り無調整 墨書:「客」	図版25-11	R351	B15876
10	7層	土師器 坏	1/6	(13.0)	(5.8)	4.0	底部:回転糸切り無調整 内面:放射状へらミガキ、黒色処理 墨書:「□〔厨カ〕」		R356	B15876
11	8・9層	土師器 坏	底部のみ	—	(6.6)	(2.3)	底部:回転糸切り→へら書き「×」 体部下端:手持ちへらケズリ 内面:放射状へらミガキ、黒色処理		R365	B15876
12	8~11層	土師器 坏	底部のみ	—	(6.2)	(1.9)	底部~体部下端:回転糸切り→手持ちへらケズリ→へら書き「□」 内面:放射状へらミガキ、黒色処理		R367	B15876
13	7層	土師器 坏	2/5	(13.8)	6.2	4.3	底部:手持ちへらケズリ→へら書き「×」 体部:手持ちへらケズリ、へら書き 内面:放射状へらミガキ、黒色処理	図版25-12	R369	B15876

図版 21 第 90 次調査出土墨書・刻書土器



(縮尺：S=1/3)

図版 22 第 90 次調査出土檜扇



〈釈文〉

此代物

□ □

□百カ
□取
□七カ
□日
□

二年十一月廿日書生 □

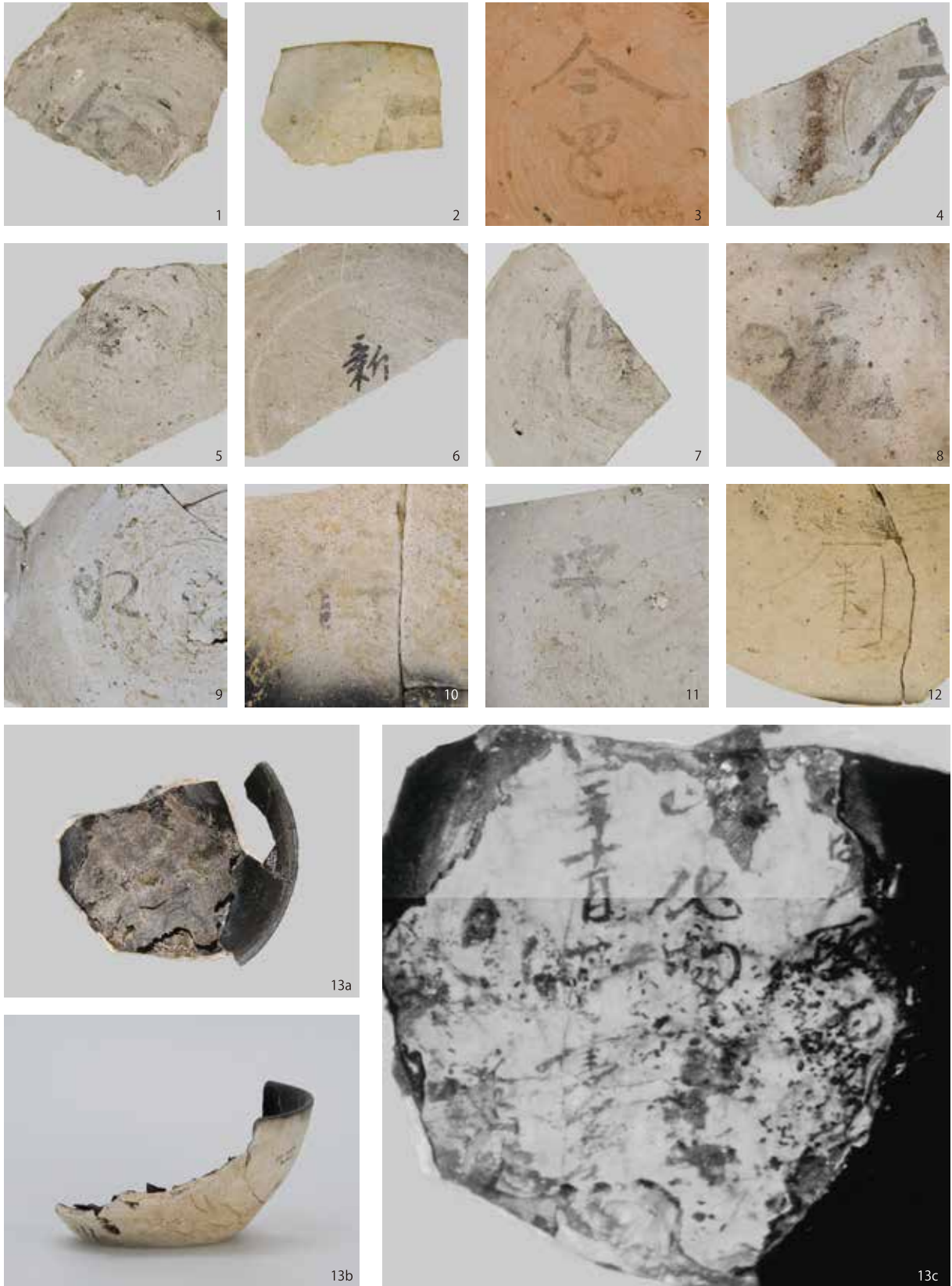
(単位:cm)

No.	層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	7層	土師器 坏	1/3	(15.0)	7.2	6.3	底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ、墨痕 体部下端：手持ちヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 漆・漆紙付着	図版25-13	R332	B15876

図版 23 第 90 次調査出土漆紙文書



図版 24 90次調査出土遺物写真



1: SD3304、2: SX3301、3・4: 11層、5~7: 8~10層、8・9: 7~11層、10~13: 7層 (縮尺1~12: S=2/3、13ab: S=1/3、13c: S=1/1)

図版 25 90次調査出土文字資料写真

遺構	位置	確認面	重複関係	形状	方向	長さ (m)	幅 (m)	断面形	深さ (m)	堆積土	主な出土遺物	図版
SD3289	北東	10層	SX3290・SX2962より新しい	直線状	E-30°-S	3.3以上	2.2	U字状	0.5	地山ブロックと炭化物を含むオリープ黒色砂質シルト	なし	11
SD3304a	南	11層	SX2962より新しい	直線状、西端で南西に屈曲	[東西] E-8°-S [南北] N-27°-E	12.6以上	1.0	皿状	0.2以上	黒褐色粘土質シルト 黒色粘土質シルト	【SD3304b】土師器環・高台環または皿・耳皿・甕、須恵器環・高台環・蓋・甕・長頸瓶・甕、須恵系土器環・高台鉢、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠC・ⅡA・ⅡB	5・6・9
SD3304b							0.5～2.8	皿状	0.3～1.2			
SD3307	北東	12層	SX2962より新しい、SE3303より古い	直線状	E-7°-S	1.8以上	2.2	凹凸のある皿状	0.5	黒褐色粘土質シルト 黒色粘土質シルト	須恵器環	5・6・9
SD3308	北東	8層	SA3291より新しい	くの字状	[東西] E-10°-南	3.6	1.2	皿状	0.1	灰白色火山灰ブロックを含むオリープ灰色シルト質砂	土師器環・甕、須恵器環、須恵系土器環、丸瓦、平瓦ⅠA・ⅡB	11
SD3309	北西	6・16層	SD3331・SD3310・SK3323より新しい	くの字状	[南北] N-23°-E [東西] E-13°-S	15.3以上	1.2	皿状	0.25	黒褐色	土師器環・甕、須恵器環、須恵系土器環・皿・高台鉢、丸瓦、平瓦ⅡC類	5
SD3310	北西	16層	SK3323より新しい、SD3309より古い	直線状	N-23°-E	6.0以上	1.2	皿状	0.06	黒褐色	土師器環・甕、須恵器長頸瓶・甕、須恵系土器環・高台環または皿、丸瓦、平瓦ⅠA・ⅡB類	5
SD3311	北西	16層	SX3269・SK3323・SK3330より新しい、SD3309より古い	くの字状	[南北] N-10°-E	7.8以上	0.8	皿状	0.12	黒褐色	土師器環、須恵器環、須恵系土器環、丸瓦、平瓦ⅡC類	5
SD3312	北西	8～12層	なし	くの字状	[北側] N-11°-E [南側] N-32°-W	2.7以上	0.4	皿状	0.11	黒褐色	なし	3・5
SD3313	東	7層	SD3314・3320・3321より新しい、SD3318より古い	直線状	N-22°-E	6.1	0.4	U字状	0.16	暗オリープ灰色炭化物少量含む	土師器環・甕、須恵器環、須恵系土器環・高台皿、丸瓦	14
SD3314	東	7層	SD3318・3320・3321・3315より古い	くの字状	[北側] N-20°-E [南側] N-24°-W	7.2	0.7	皿状	0.05	黒色 炭化物を含む	土師器環・甕、須恵器環・長頸瓶・甕、須恵系土器環・皿・高台環または皿、丸瓦、平瓦ⅡC類	14
SD3315	東	7層	SD3321・SD3314より新しい	直線状	N-18°-E	2.3	0.3	皿状	0.12	暗オリープ灰色	土師器環、須恵器環、須恵系土器環	14
SD3316	北東	6層	SE3303より古い	直線状	E-12°-S	1.2	1.9	U字状	0.22	黒褐色	土師器環・高台鉢・甕、須恵器環、須恵系土器環・皿・高台環または皿、丸瓦、丸瓦ⅡB類、獣骨	6・14
SD3317	東端	7層	なし	コの字状	N-27°-E	3.4	0.3	皿状	0.07	黒褐色	土師器環・甕、須恵器環、須恵系土器環、丸瓦、平瓦	14
SD3318	南東	7層	SD3313・3319より新しい	弧状	E-18°～36°-S	11.4	0.3	皿状	0.1	黒褐色	土師器環・甕、須恵器長頸瓶・甕、須恵系土器環・皿・高台環または皿、平瓦	14
SD3319	南東	7層	SD3318より古い	直線状	E-25°-S	2.6	0.2	皿状	0.1	黒褐色	土師器環、須恵器環、須恵系土器環・皿・高台環または皿	14
SD3320	東	7層	SD3313・3314より古い	直線状	E-7°-S	8.7	0.5	皿状	0.08	黒褐色	土師器環・甕、須恵器環・甕、須恵系土器環、平瓦	14
SD3321	東	7層	SD3313より新しい、SD3313より古い	直線状	E-36°-S	6.3	0.3	皿状	0.1	黒褐色	土師器環・甕、須恵器環、須恵系土器環・高台環または皿、瓦があり、瓦には丸瓦、平瓦ⅠA類	14
SD3322	中央	7層	SD3321より新しい	直線状	N-36°-E	2.5	0.2	皿状	0.02	黒褐色	土師器環、須恵系土器環	14
SD3323	西	16層	SK3323より新しい、SD3309より古い	直線状	E-21°-S	3.7以上	0.8以上	皿状	0.2以上	黒褐色	なし	5
SD3333	西	16層	SK3323より新しい	直線状	E-20°-S	4.1	0.7	U字状	0.14	黒褐色	なし	5・12
SD3334	西	16層	SK3323より新しい	直線状	E-24°-S	6.1	1.1	U字状	0.06	黒褐色、炭化物少量含む	なし	5・12

第3表 検出溝一覧

遺構	位置	確認面	重複関係	形状	規模 (m)	断面形	深さ (m)	堆積土	主な出土遺物	図版
SK3323	西	16層	SX2962・SD3309・3331・3333・3334より古い	長楕円形	6.0×2.3以上	凹凸のある皿状	0.3	地山ブロックを多く含む暗灰黄色・暗褐色シルト [人為的埋土]	なし	5・12
SK3324	北	SX3290	SX3290より新しい、SX2962より古い	断面のみ確認	1.5以上	逆台形状	0.8	黒褐色粘土質シルト	なし	6
SK3325	中央	SX3290	SX3290より新しい、SX3301より古い	断面のみ確認	1.7以上	逆台形状	0.3	地山ブロック・炭化物・焼土を含む黒褐色土 [人為的埋土]	なし	6
SK3326	北西	16層	SD3309・3310より古い	長楕円形	2.9×1.2	平面のみ確認		黒褐色	なし	5
SK3327	北東	7層	なし	隅丸方形	0.8×0.7	台形状	0.34	黒褐色	土師器環・耳皿、須恵器環・蓋・甕・長頸瓶、須恵系土器環、丸瓦、平瓦ⅡB・ⅡC類、ウマ歯、シカ肋骨	14
SK3328	中央	7層	なし	不整楕円形	1.2×0.7	台形状	0.11	黒褐色	土師器環・甕、須恵器環、須恵系土器環、丸瓦	14
SK3329	中央	7層	なし	不整円形	0.8×0.7	台形状	0.12	黒褐色	土師器環・甕、須恵系土器環、瓦	14
SK3330	中央	8～11層	SX2962より新しい、SD3311より古い	楕円形	3.1×1.9	皿状	0.35	にぶい黄褐色シルト	土師器環・甕、須恵器環・高台環・鉢・甕、製塩土器、瓦、鉄滓	14
SK3331	南東	7層	SF3296・3297より古い	楕円形	1.4×0.7	皿状	0.08	炭化物を多く含む黒色シルト	なし	14
SK3335	中央	8層	SX3290より新しい	断面のみ確認	1.9×1.0	皿状	0.5	【上層】地山ブロック・炭化物を含む黒褐色・暗オリープ褐色砂質シルト 【下層】炭化物を少量含む暗褐色シルト質砂	なし	6

※SK3323・3325以外の堆積土は自然堆積土。

第4表 検出土壌一覧

3. 総括

(1) 遺物について

出土した遺物には土器、陶磁器、瓦、木製品、土製品、石製品、動・植物遺存体がある。とくに堆積層から古代の土器が多量に出土しており、灰白色火山灰を含む層（第7層）より下層からも一定量出土しているほか、他地域に系譜をもつ外来系土器も出土している。

ここでは第7層より下層で比較的出土量の多いSX3301 整地層・第8～11層出土土器、および外来系土器の特徴や年代について記述する。

A、SX3301 整地層・第8～11層出土土器

◎SX3301 整地層出土土器

土師器坏・高台坏・耳皿・甕、須恵器坏・高台坏・長頸瓶・甕、須恵系土器坏・皿・高台鉢、灰釉陶器碗がある。破片数は土師器 56 点／45.9%、須恵器 30 点／24.6%、須恵系土器 35 点／28.7%、施釉陶器 1 点／0.8%で、土師器が半数近くを占めて須恵系土器は約 1/4 である。機能別では、供膳具（坏・皿類）は 77 点（土師器 35・須恵器 8・須恵系土器 33・灰釉陶器 1）／63.1%、煮炊具（土師器甕）は 21 点／17.2%、貯蔵具（須恵器長頸瓶・甕）は 22 点／18.0%、不明 2 点／1.7%となり、煮炊具と貯蔵具で 3 割以上を占めるのが特徴的である。

年代的な位置づけについて、須恵系土器坏（図版 13-16）は口径が大きく体部が外傾して直線的にのびるものである。こうした特徴は、多賀城出土土器編年（白鳥 1980、『本文編』）の E 群土器にあたる政庁地区 SK90 出土須恵系土器（『本文編』）に類似する。E 群は灰白色火山灰層前後の 10 世紀前半頃とみており（『補遺編』）、本調査でも層位的には矛盾しないことから、灰白色火山灰層降下前の 10 世紀前半頃と考えられる。

◎第8～10層出土土器

土師器坏・碗・甕、須恵器坏・蓋・稜碗・鉢・甕、須恵系土器坏がある。破片数は土師器 125 点／61.6%、須恵器 67 点／33.0%、須恵系土器 10 点／4.9%、施釉陶器 1 点／0.5%で、土師器が主体となり須恵系土器はわずかである。また供膳具 123 点（土師器 70・須恵器 43・須恵系土器 10）／60.9%、煮炊具 55 点／27.2%、貯蔵具 24 点／11.9%で、煮炊具が約 1/4 を占める点が目立つ。

土師器主体で須恵系土器が少ない点は、D 群土器にあたる第 61 次第 10 層出土土器（『年報 1991』）に類似し、この土器群は 9 世紀第 4 四半期頃とみており（『年報 1994』）、同様の年代が考えられる。

◎第11層出土土器

土師器坏・蓋・甕、須恵器坏・蓋・稜碗・高盤・盤・甕がある。破片数は土師器 13 点／25.5%、須恵器 38 点／74.5%で須恵器が主体となり、供膳具 41 点（土師器 6・須恵器 35）／80.4%、煮炊具 7 点／13.7%、貯蔵具 3 点／5.9%で供膳具が約 8 割を占める。須恵器坏には回転糸切り後手持ちヘラケズリが施されるコップ形の坏（図版 18-2）のほか、須恵器の坏底部破片にはヘラ切り後ナデあるいは無調整のものが 8 点、手持ちヘラケズリのもの 1 点、糸切り無調整のものが 4 点含まれる。須恵系土器は出土しておらず、また非ロクロ土師器がほとんど確認できないことから、C 群土器に位置づけら

れる。C群は第62次SI2153・2160A出土土器と第60次SE2101B-Ⅲ層出土土器に分けられ(『年報1992』)、糸切り無調整の須恵器坏が出現するのは後者の土器群からであり、第11層出土土器は後者に近い様相を示す。

年代について、SE2101B-Ⅲ層出土土器は共伴する天長9年(832)と書かれた漆紙文書から、832年を遡らない9世紀前半頃とみている(『年報1991』)。また同じC群の第69次SK2483出土土器(『年報1998』)では、腰部の張りが弱く高台が縦長長方形の灰釉陶器塚が出土しており、これは猿投系施釉陶器編年のVI期古段階(830～860年頃)から中段階(860～890年頃)の過渡的な資料で(尾野2008)、9世紀中葉頃と推定される。このことから現状でC群としている土器群は9世紀前半でも中葉に近い時期と考えられ、これと第8～10層の下限が9世紀第4四半期頃であることを考慮し、第11層は9世紀中葉～後半頃の所産と考えられる。

ところで、SX3301および第8～10層出土土器は、煮炊具と貯蔵具が全体の3割以上を占めているが、これは隣接する第86次調査区で出土した土器の組成とは異なる傾向を示している。すなわち、土器の編年的位置づけや層位から近似する時期と考えられる第86次調査第9層(『年報2013』)では、供膳具133点(土師器39・須恵器8・須恵系土器86)／83.8%、煮炊具12点／7.4%、貯蔵具11点／8.8%で供膳具が卓越しており、第90次第8～10層とは煮炊具と貯蔵具の割合で大きく異なる。周辺の遺構の性格を考えるうえで参考となる資料であろう。

B、堆積土出土の外来系土器

今回の調査区では大戸窯産須恵器、会津型甕、常陸産須恵器といった他地域に系譜をもつ土器が出土しており、それぞれ特徴をみていく。

◎大戸窯産須恵器

大戸窯産須恵器は破片数で長頸瓶83点、坏3点出土した(註1)。長頸瓶全体の破片数が212点であることから、全体の約4割を占める。これまで多賀城内で大戸窯産として報告されているものは10点で(註2)、これだけまとまって出土した例はない。

時期としては、図版19-7のように口縁部の外反が弱いものは南原19号窯式から上雨屋107号窯式で9世紀中葉～末、図版17-5や図版19-14のように口縁部が大きく外反する広口のものは上雨屋112号窯式で10世紀前葉と考えられる(会津若松市教育委員会1994)。多賀城南面に位置する山王遺跡八幡地区や伏石地区でも大戸窯産須恵器は出土しているが、多くは上雨屋12号窯式から上雨屋107号窯式で9世紀代のものが中心とされる(宮城県教育委員会1997)。多賀城内では本調査以外にも、第78次道路西側堆積8層出土長頸瓶が上雨屋112号窯式(『年報2006』)、第81次第7b層出土長頸瓶底部は三角形高台であることから上雨屋112号窯式以降と考えられ(『年報2009』)、山王遺跡よりも新しい時期まで出土する傾向が指摘できる。

さらに坏類(図版19-5)が出土している点も重要である。大戸窯産の供膳具はこれまで注目されてこなかったが、第30次SK967・1019出土盤(『年報1977』第38図1、第77図11)や第56次第2B層出土蓋(『年報1989』第48図4)、第70次SK2548出土盤(『年報1999』第49図40)は大戸窯産の可

能性があり、わずかながら多賀城内でも供膳具が出土している。ただし、多賀城全体の大戸窯産須恵器の出土状況はいまだ把握できておらず、今後の検討課題である。

◎会津型甕

図版 18-9 や図版 19-2 の土師器甕は、平底で胴部にヘラケズリ後平行タタキが施されている。こうした特徴を持つ甕は、会津地方に分布の中心を持ついわゆる会津型甕と考えられ(山中 2000・2003)、宮城県内では栗原市域や石巻市域周辺で出土しているが(宮城県教育委員会 2016)、多賀城およびその周辺ではこれまで確認されていない。出土層位が第 8~10 層および第 7~10 層であることから、9 世紀第 4 四半期頃から 10 世紀前葉頃を中心とした時期と考えられ、大戸窯産須恵器が出土する時期とも重なり、この時期の会津地域と多賀城の関係を考えるうえで注目される。

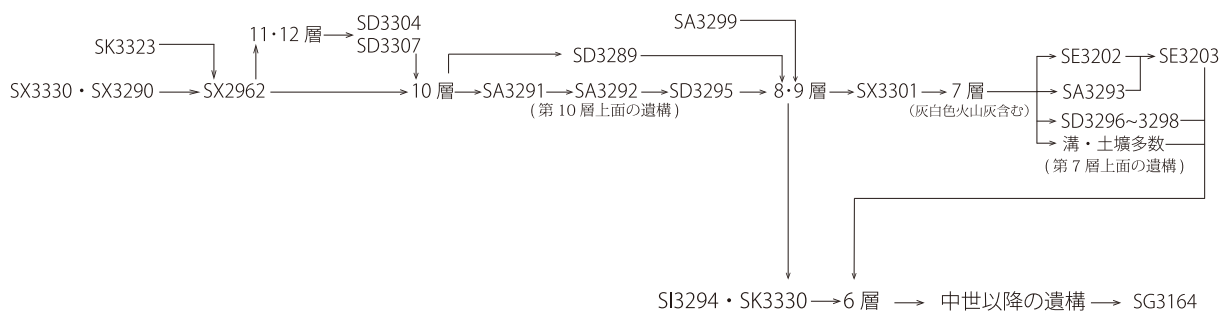
◎常陸産須恵器

1 点のみであるが常陸産須恵器坏が出土している(図版 19-6)。胎土に白雲母を含むことから新治窯跡群で生産されたと考えられる。年代は、底部に一方向へ手持ちヘラケズリ、体部下端に幅の狭い手持ちヘラケズリが施されること、底径が 7cm 代におさまることから、新治窯産須恵器坏編年の 4 類で 9 世紀前半と考えられる(赤井・佐々木 1996)(註 3)。多賀城における常陸産須恵器の出土例は非常に少なく(註 4)、今後の類例の増加が期待される。

(2) 遺構について

A、遺構の年代について

古代の遺構には、基礎地業と積土遺構からなる区画施設、通路跡、柱列跡、井戸、小溝群、溝、土壇などがある。これらの遺構の重複関係や基本層序との関係は以下の通りである。



灰白色火山灰降下前の遺構(第 7 層より古い遺構)には、SX3300 積土遺構・SX3290 基礎地業からなる区画施設、SX2962 通路跡、通路跡廃絶後の遺構(第 10 層より新しい遺構)があり、通路跡には側溝を伴わない段階と側溝が布設される段階がある。区画施設・通路跡からその構築年代を限定できる遺物は出土していない。そこで、まず比較的多くの遺物が出土した SX3301 整地層と通路跡の側溝である SD3304 溝の年代について検討する。

SX3301 整地層は灰白色火山灰降下よりも古く、出土した須恵系土器の年代から 10 世紀前葉頃と考えられる。また、SD3304 溝は須恵系土器が出土していることから 9 世紀後葉以降で、SX3301

より古いことから10世紀前葉以前となるが、SX3301との間に第8～10層および第10層上面の遺構を挟むことを考慮すると、その中でもやや古く考えられる。なお、第10層上面の各遺構や第8～10層出土遺物の内容にも矛盾は無い。

次に、通路跡については第81・86次調査でも時期は限定できていないが(『年報2009・2013』)、第86次調査で最も古い盛土の直上から第Ⅱ期の平瓦ⅡB類が出土しており、その上限は多賀城跡第Ⅰ期まではさかのぼらない。したがって、SX2962通路跡の年代は8世紀後半から10世紀前葉で、9世紀後葉以降に側溝(SD3304・3307溝)が設けられたと考えられる。

区画施設はSX2962通路跡より古い。SX3290基礎地業直下の第15層上面から非クロク整形の土師器坏(図版13-1)が出土しており、その上限は第Ⅰ期の8世紀前半頃となる。

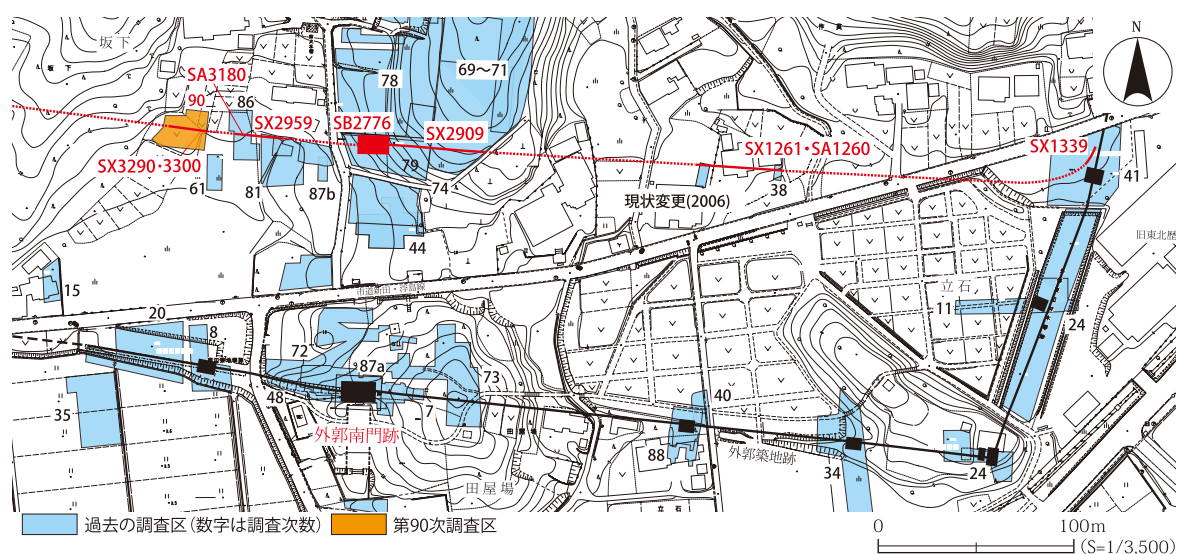
以上のほか、灰白色火山灰降下後の遺構については検出面を覆う第6層出土遺物の年代から12世紀後半頃までの遺構群とみられるが、12世紀代の遺物はごく少数にとどまる。10世紀前葉～11世紀代の遺構が主体とみておきたい。

B、主な遺構について

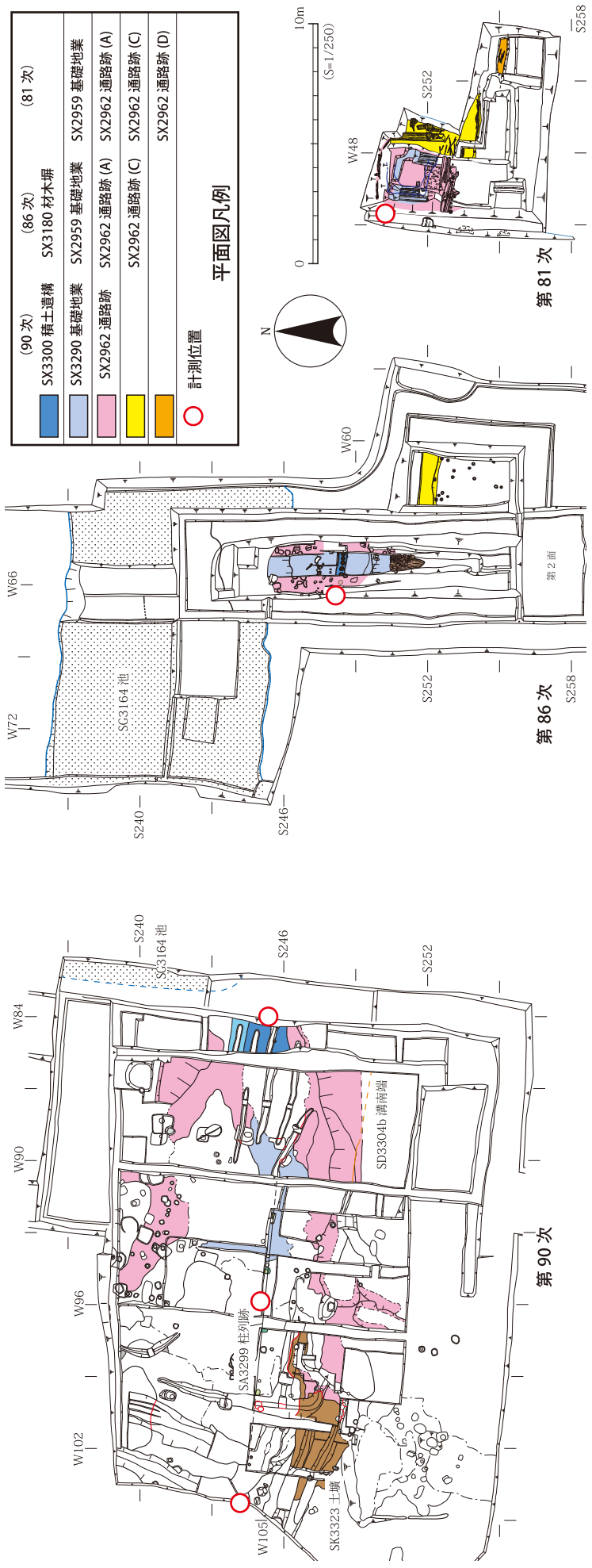
(i) 区画施設

第Ⅰ期外郭南辺の一部にあたるSA3180材木塀(『年報2013』第86次)から西約20m、北約4mの地点で、SX3290基礎地業とSX3300積土遺構からなる東西方向の区画施設を検出した(図版26・27)。第Ⅰ期外郭南辺は政庁南大路上に位置する南門(SB2776門跡)の東西を直線状に延びる区画施設で、丘陵部でSX1339・2909積土遺構(『年報1982』第41次・『年報2007』第79次)を、低地部でSA1260材木列(『年報1981』第38次・『年報2006』2006年度現状変更)と前述のSA3180材木塀を確認している。本調査区のSX3300積土遺構はこれまで確認した区画施設の西側延長線上に位置し、出土遺物や層位的にも第Ⅰ期とみて矛盾は無い。

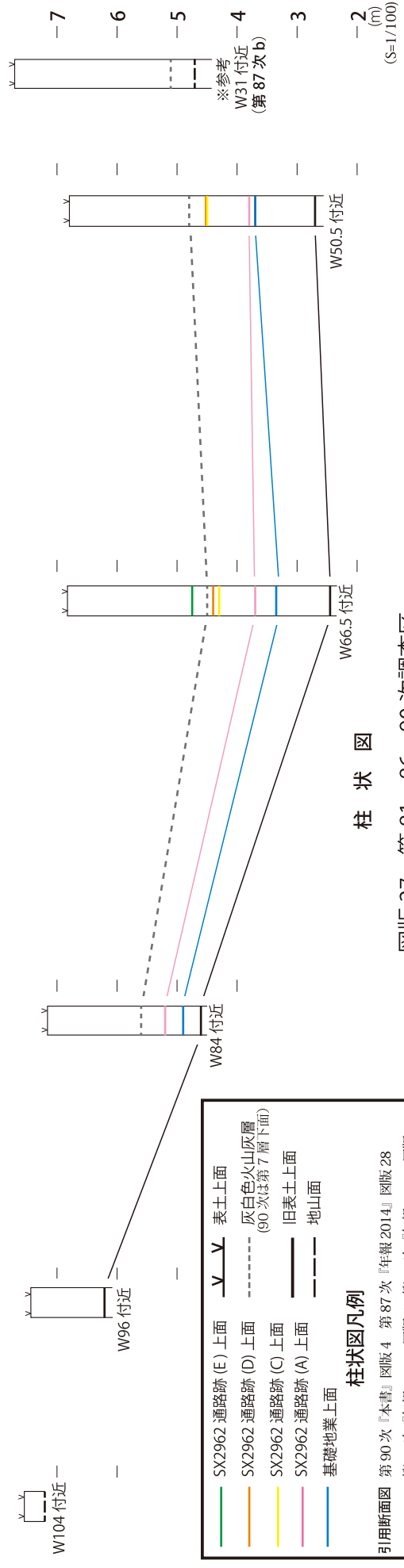
外郭東辺西側で検出したSX1339積土遺構とSB2776門跡東側で検出したSX2909積土遺構は、



図版26 外郭南辺の位置



平面図



柱状図

図版 27 第 81・86・90 次調査区

柱状図凡例

—	SX2962 通路跡 (E) 上面	— V — V —	表土上面
—	SX2962 通路跡 (D) 上面	— — — —	灰白色火山灰層 (90 次は第 7 層下面)
—	SX2962 通路跡 (C) 上面	— — — —	旧表土上面
—	SX2962 通路跡 (A) 上面	— — — —	地山面
—	基礎地業上面	— — — —	

引用断面図 第 90 次『本書』図版 4 第 87 次『年報 2014』図版 28
 第 86 次『年報 2013』図版 5 第 81 次『年報 2009』図版 3-7

2.0～2.2mの幅で土を均質な厚さでほぼ水平に積んだ遺構である。両側には積土に沿って溝、段、柱列があり、柱列は一辺0.3～0.5mの隅丸長方形もしくは楕円形を呈す柱穴が1.2～2.2mの間隔で延びる。今回検出したSX3300積土遺構は、黒褐色土を主体とした盛土による基礎地業上に幅2.1m、南北の立ち上がり70°前後で黄褐色土と黒褐色土を一部版築状に積んだもので、段や溝は伴わないが幅や積土の様相がSX1339・2909と共通する。また、SX3300南辺の西側延長上にはSA3299柱列跡があり、一辺0.4～0.6mの隅丸長方形を呈す柱穴が2.4～2.5mの間隔で延びる。この柱列はSX1339・2909に伴う柱列と同様のものとみられ、SX3300積土遺構はそれらと一連の区画施設と捉えられる。

この結果、第I期外郭南辺の総長は、SA3299柱列跡を含めて外郭東辺から約470m以上となる。また、今回と第86次調査の成果をあわせると、坂下地区における区画施設の構造は低地部が材木堀、丘陵部にかかる箇所では積土遺構であることが判明した。

積土遺構についてはこれまで、その上部に柱列や溝が確認されず、SX2909積土遺構の北側に土取り穴とみられるSK2891・2899土壌があることなどから土堀もしくは築地堀である可能性を考えている（『年報2009』）。本調査区西端でも、底面に凹凸があり人為的に埋め戻された土取り穴とみられるSK3323土壌を確認しており（図版5・12）、同様の可能性が考えられる（註5）。その場合、第86次調査区（南門から西に66m）と本調査区（同84m）の間に材木堀との転換点があり（註6）、西側の丘陵上には築地堀が延びる可能性が想定される。

（ii）通路跡

第81・86次調査で検出した、政庁南大路から坂下地区西側の丘陵に延びるSX2962通路跡の西側の延長を確認した。区画施設の廃絶後にその両側に盛土して造られた通路で、横断面形は台形状を呈し、両側への土砂の堆積後には側溝が設けられている。路面は削平により失われているが、第86次調査では堆積層をはさんで区画施設の高まりが盛土で覆われており、その最上部には路面と想定される固くしまった細砂層を確認している。また、盛土は西側ほど薄くなりながら幅を広げて丘陵に取り付くとみられる。第81・86次調査とあわせ、この通路は上幅2.0～3.0mで沢内部を57m以上延びることが判明した。

この通路跡はこれまで第81・86・90次調査区で確認しており、それぞれ1～4回の補修がみられる（図版28）。まずその対応関係を整理し、それに基づいて全体の構造と変遷を検討する。

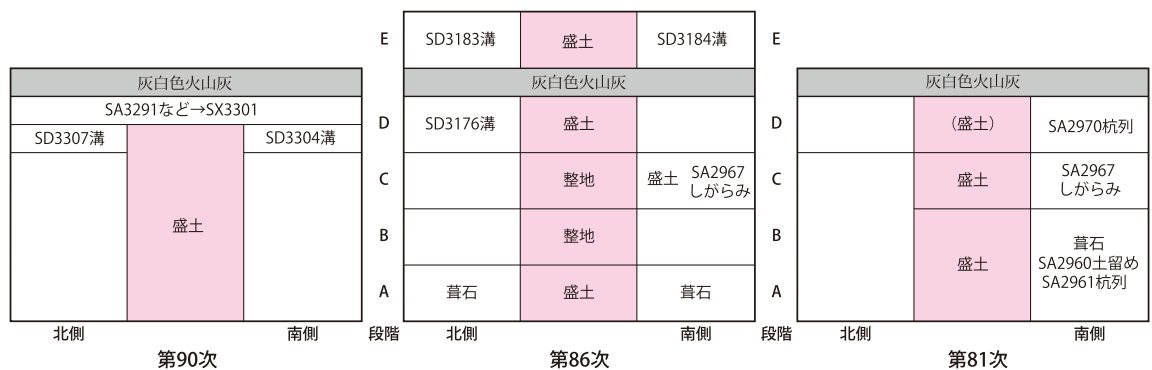
対応関係 まず、各調査区における通路跡の存続年代をみると、構築年代は出土遺物や区画施設との関係からいずれも8世紀後半以降とみられる。一方、廃絶は第86次調査区が灰白色火山灰降下後の10世紀中葉以前で、第81・90次調査区が火山灰降下前の10世紀前葉以前である。なかでも、第90次調査区では側溝の廃絶から火山灰降下までの間に少なくとも二つの遺構面があることから（第8・10層上：図版11）、より早く機能を終えた可能性がある。

この存続期間中に、各調査区の通路は自然堆積層を挟みながら盛土や側溝の布設などによって補修されており、最も補修が多い第86次調査区ではAからEまで5段階の変遷がみられる。

各補修の年代は B・C が 8 世紀末～9 世紀前半、D が 9 世紀後葉から 10 世紀前葉である。出土土器や構造の共通性から、第 81 次調査区でみられた 2 回の補修は C・D の段階に、本調査区でみられた側溝の布設による補修は D の段階に対応し、側溝布設前の期間は A～C の段階に対応するとみられる。

通路跡の構造と変遷 上記の対応関係に基づき、地山がスクモ層の第 81・86 次調査区を低地部、地山が岩盤で低地から丘陵に上がる箇所第 90 次調査区を、丘陵部近くとしてみていく。まず、構築当初の通路は低地部では上幅 2.0m～3.0m であるのに対し(86 次)、丘陵部近くでは上幅 4.5m～12.0m 以上で西側ほど広がる。高さはともに最大 1.1～1.2m だが、丘陵部近くでは西側ほど盛土が薄くなり、周囲との高低差を減らしながら丘陵に取り付くとみられる。また、低地部の盛土両側斜面や端部には土留め用の石や杭列、葦石が伴うのに対し、丘陵部近くではみられない。この様相は次の B・C 段階でも同じ傾向にあり、低地部では B 段階の整地による補修を経て C 段階には整地の南側に護岸のための SA2967 しがらみを伴う盛土で補修されるが、丘陵部近くでは高まりのまま維持されている。土留め用の石やしがらみなどの護岸施設は沢が深くなる低地部だけに設けられており、土砂や水の流れ込みによる盛土の崩落などを防ぐためのものと考えられる。低地部では、C 段階の補修前までに通路の高まり周辺が平坦化した状況を確認しており(『年報 2009』図版 3・『年報 2013』図版 10)、土砂の流れ込みの多さがうかがわれる。D 段階には、丘陵部近くでも南北方向の平坦化が進み(図版 6) 両側に側溝が設けられ、低地部でも側溝(第 86 次 SD3176 溝)が設けられた可能性が高い(『年報 2013』図版 9・10)(註 7)。

ところで、D 段階の補修後から通路の廃絶までには調査区ごとに差がある。第 86 次調査区では E 段階の 10 世紀前葉～中葉頃まで機能する一方、第 90 次と第 81 次調査区では D 段階を最後に 10 世紀前葉頃には廃絶し、なかでも第 90 次調査区はより早く機能を終えたとみられる。廃絶時期と各地点の標高との関係をもととみると(図版 27 柱状図)、通路の廃絶は標高が高い 90 次、81 次、86 次の順で推移しており、土砂の堆積による平坦面の形成が丘陵のある東西から沢の中心に向かって進んだことがうかがえる。平坦面の形成に伴って徐々に短くなった通路は第 86 次調査区の E 段階を最後に埋没し、付近は平坦化したとみられる。



※中央の列は高まりの構築・補修方法、「北側」「南側」は通路斜面・端部に伴う施設

図版 28 SX2962 通路跡の変遷模式図

註

- 註1 大戸窯産須恵器の同定および時期については、福島県文化振興財団菅原祥夫氏、東松島市教育委員会佐藤敏幸氏よりご教示いただいた。なお土器の出土層位は、長頸瓶が8～11層/3点、7層/18点、6・7層/38点、6層/16点、1～5層/8点、坏は11層/2点、7層/1点である。
- 註2 報告されているのは、第70次表土/2点（『年報2002』）、第78次道路西側堆積8層/1点・SK2834/3点（『年報2006』）、第81次第7b層/2点（『年報2009』）、第87次第4層/2点（『年報2014』）である。
- 註3 産地や時期については、佐々木義則氏からご教示いただいた。
- 註4 未報告ながら第43次調査で円面硯、第83次調査で高台坏がそれぞれ1点ずつ出土している。
- 註5 同様の特徴を持つ土取り穴を第I期外郭南辺の西側延長上に近い第84次調査区北端でも検出している（『年報2012』）。
- 註6 城内ではその転換点は確認されていない。城柵の外郭施設で異なる構造の接合・転換点が調査された例には秋田県払田柵跡（第9次、SF75築地塀とSA1100材木塀：『秋田県教育委員会1999』）と岩手県徳丹城跡（第61次、SF1230築地跡とSA1227外郭丸太材木列跡：『矢巾町2005』）がある。いずれも両遺構が隣接する境界地点で特有の構造は確認されていない。
- 註7 第81次調査区ではD段階の補修として、南側でしがらみの可能性の高いSA2970杭列を検出している（『年報2009』図版3・13）。伴う盛土は残存せず、詳細は不明瞭である。

参考文献

- 会津若松市教育委員会 1994『会津大戸窯一遺物編一』会津若松市文化財調査報告書第37号
- 赤井博之・佐々木義則 1996「新治窯跡群産須恵器杯A Iの変化―消費地の様相―」『婆良岐考古』第18号 pp. 1-25
- 秋田県教育庁払田柵跡調査事務所 1999『払田柵Ⅱ一区画施設一』秋田県文化財調査報告書第289集
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII pp. 1-38 宮城県多賀城跡調査研究所
- 宮城県教育委員会 1997『山王遺跡V―第2分冊（伏石地区・考察）一』宮城県文化財調査報告書第174集
- 宮城県教育委員会 2016『御駒堂遺跡』宮城県文化財調査報告書第244集
- 矢巾町教育委員会 2005『徳丹城跡―第60・第61次発掘調査一』
- 山中雄志 2000「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相（後編）」『福島考古』第41号 pp. 51-70
- 山中雄志 2003「古代会津地方の長胴甕にみる特質について」『行政社会論集』第15巻第3号 pp. 217-236 福島大学行政社会学会